

雅聞錄

四

昭和二年六月中浣起筆

特別  
14  
1919  
393



雅間録

昭和二年六月中流起筆

於牛込矢来町使寫

○大谷句佛上人首分の宗家の本山のまじりあり自分  
 の交際であるが其の墨蹟は一つもみだりに句も画も  
 ようくもみだりに一枚手も入らぬと思ひてゐる。年々  
 入らざるゝ。偶々坊主の句佛の年許本が書  
 者居りありてから、多々を繕ふに、まゐり村止り精  
 の著しは佛の傍に論や村止り此の著者述の著  
 又本山を巡らんが、其の本を親すと申す句  
 佛の句符が出た、まゐりその符にて、愛女位



PLATE 24

モデル No.1

代のこのと見えく、句も穉氣を帯びてあり  
が、正しく其の年相があるから、筋助の感がある  
り、舞末であるが、巻末に Kosu Datami と羅馬  
字の印が捺してある。村上の本山から彼つのは  
こ思つたけい、るも、何れ山主が此者を翻讀し、且  
つ保取し、たこと、此印を捺してあるのむ、その  
る村上に、此者を示し、たら、何れの感があるか、  
村上の孰か、人のあるから、或る様、今、此者を  
贈り、る、こと、思ふ

の六月十五日、神田の書肆を訪ね、二三の

圖書を購ひ入る、中に一二編をへきよめがある

一 法華經文字聲韻音刊の備集 三冊

此書播磨書守山比丘快倫の撰る係  
り、慶長十八年の刊行とす、乃ち  
卷末に左の如く刻す

皆慶長十八年三月日理教坊  
快倫謹誌

尚卷に山門西塔千葉院花本の印  
記あり

卷首編者の序に徴する

音義有兩本畫精微狀尚專於和  
音不備於韻切故清濁易迷聲韻  
巨難今法附後名之五音五音目  
以象唐韻委於反切又准韻會每  
字付宮商角徵羽五徵半商之五  
類音清濁輕重而五音相配云々  
此書の大要を見よ  
此書韻可音研究に重案のものと見  
最上稀歎に属す 價八十圓

一 諸寺縁起集

二冊

此書渡四寺珍花の古写本を影写

一、此のまゝに映字の類をこゝにい  
ぬる所左の如し

法華八講像起

四天王寺像起

望雲寺像起

大南寺像起

元興寺像起

興福寺像起

西大寺像起

滋木河寺像起

招提寺像起

以上 乾卷

長谷寺像起

東大寺像起

勝尾像起

竹生島像起

南寺像起

維摩舍像起

常樂舎事

法花舎

超昇寺

興福院

涌恩寺

法隆寺

多武 峯  
 橘 寺  
 河原 寺  
 本元 寺  
 山田 寺  
 常 麻 寺  
 北京 淨願 寺  
 久田 寺  
 金剛 山

卷尾  
 右諸寺縁起集以東京府公護

圓寺所藏古写本影録  
 明次九年十一月  
 雪

雪平の廣瀬進一の語也上巻の尾に廣  
 瀬進一印の朱印あり卷首に淨法  
 庵秘笈印の印記あり廣瀬の爲  
 記より廣瀬雪平を能く云友小  
 野梓 常々此人の文を伺くり

一 藝苑奥之細道 二冊  
 奥の細道注釋者種々あり給入の事  
 七あり家蔵に三四ありと此者始めて

午に入りのものあり、藝師の注ハ此の特  
 色をいふ余のたも表にふと挿入十枚  
 の似畫にあり、畫ハ此を村の葉に成り  
 形も七ありと似味探すべし、藝師注の  
 撰者ハ<sup>浪華</sup>子信、元巻首に梅家の  
 序あり、<sup>浪華</sup>稀觀のものとも、巻末春  
 星堂花版と刻あり、安政五年版挿給  
 十三あり

○楠瀬日年より一函の印を贈らる、函中収  
 あり印通計十四顆、冠閑防共三顆揃三組  
 外一顆閑防、壽山三顆、他ハ凍石に近々きもの  
 二印石質極めて可なり、中ハ三顆日年

の刻を好むものあり、たこ之のを捺す、

六月十二日記

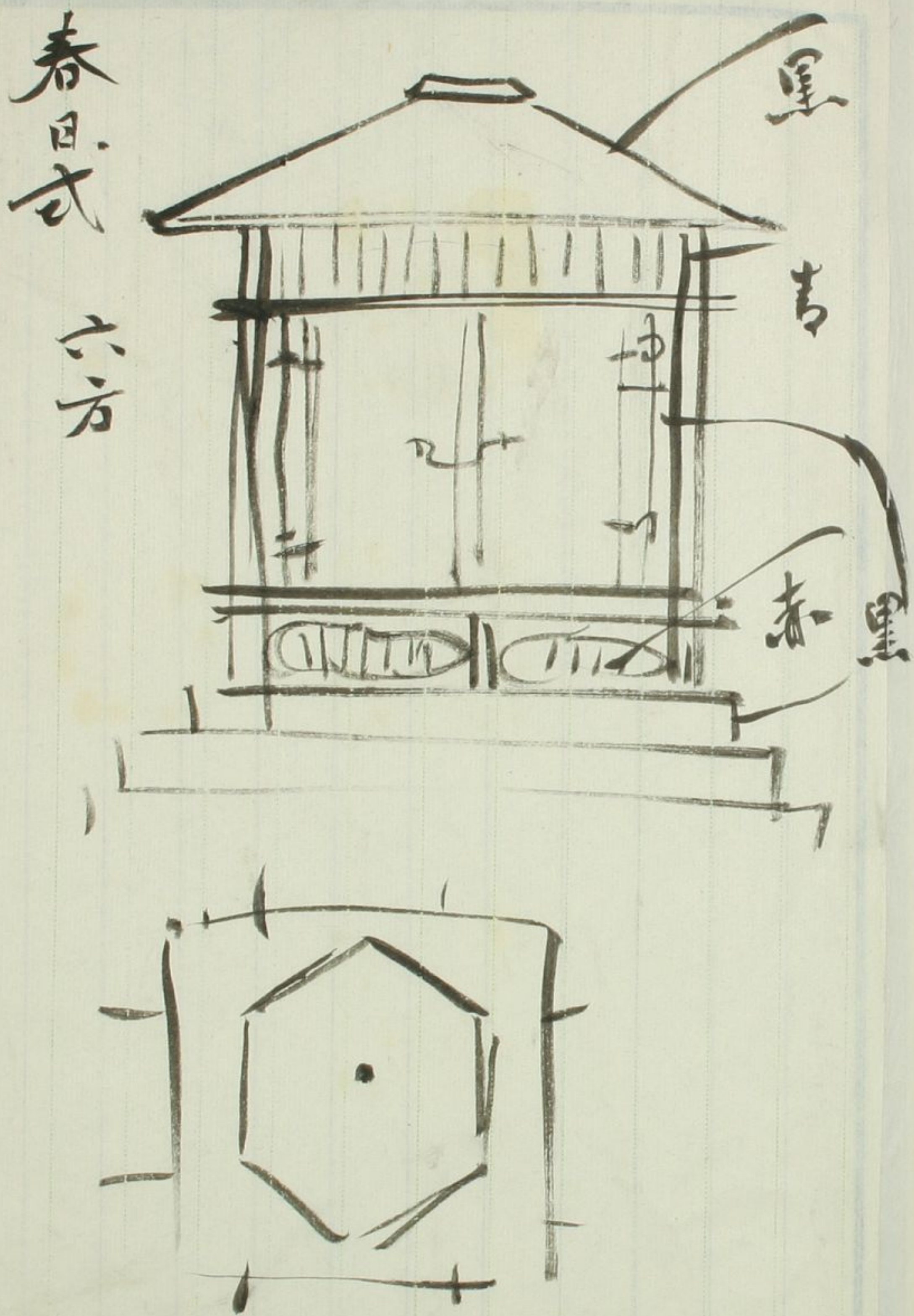
壽山石



白凍



○大隈彦蘆野邸内にある稲荷社を大子の物部  
 初号者の祝魂殿と号せんとすの儀あり高田松本  
 より余と云匠を委ねてしとの囑に依りし祀  
 ろるべき物部者の氏名の鳥の子紙に録し伊  
 勢曆を展用する柀の装二本柱の柀に装  
 し展用自在なるしと先づ立案を立て  
 しが、之を據法して六方とする方物部者  
 の今形も出来且つ進に物部者の数の僧  
 すゆ其に餘地を存するに免るぬ都て  
 るんと更なる案に、扱之んを容る、厨  
 子ハ皆すんきやと考案あり、柀漸の年  
 未だに付之んをお法し、春日式にて



春日式

六方



死ふしといふまのつとむるものと云ふに從ふこととせり  
 神佛何れに偏しとせしむるは譯するんば  
 春日式に依りてしるべき也其の大体ハ略  
 圖の如くありて六角ありて六方に戸を凡九は  
 中の氏名を六方にし見ると得べし制れ凡九  
 春申大友良のその号しつものな托する方よりし  
 京都より由り成續しつものな日年とい  
 言ふのとき寸法の定まり次第日年と云ふ  
 良くも寸法のこととせしむるべし 六月十一日記  
 ○柿瀬日年ハ數點の測防の測を囑せ  
 へし一試を在語を撰ふ  
 血性男子 而今雪古

意氣如雲  
 倅倒古托坤  
 志在不朽  
 身寒道道南  
 冷趣

性急才拙  
 放言岳  
 俗外狂徒  
 文章報四  
 麴部尚書

○岡田朝大らの隨筆ハ意心觀といふか出版  
 せん云田ハ刑法の著者一時その大名に教へら  
 んんか文才あるを硯友社に列し川柳研究  
 せむと知んせむあり可なりゆ方面に教味も  
 ある筈自分七お後ハ岡柳ひあるから、己を  
 其の隨筆と購ふを後んせ見れば、安志の

幼穉のころであるのかと叱し比巻首のほし  
かきを見よぬぬ流大子の法徳宛紙に載  
せしよが大部をも占めてあると自白し  
るが大体といろくの隨筆の板書等  
随分有觸れた材料が施陳さんとの本  
録にある川柳はと念入るが特殊の着  
眼があるせもある。古の隨筆の校書をする  
ことがあらずしりわいといふ言ひぬが、あせのす  
をえに引高しう、自説をぬくやうすんは  
の材料も引まてくるの、青山記話や話し  
本をのの記すをもとのさうは、おぼし  
のいふ幼穉の感がある、誰んし趣味  
十二

の未熟時代は何か書物を讀んで意味を  
感ずるとえんを板書することもあるが、えんを  
あつちに出せざるは、意心子としてハ似  
り、初心ひいあるまゝか、私が壮年の頃、今古  
雅談といふものを出版したことがある、今ハ  
その出版を憶てあるが、意心子の北著の先  
づき、似れよのむもある、秀才意心子今ハ志  
表と見へる、あの人ハ西洋でも行き支那  
も長く、その硯友社中にも同人のおお、特  
の材料が多いが、あつちであるの、一切えん  
んひる、あつちの何れか、あつち、六月  
十七日記



六折口角ハ折の目去難目ぞ折々の感し此ことを皮  
 肉の奇撃ハ筆を弄して見~~た~~此の一篇がけ  
 ハ漢文山簡じである。案するは漢興の偶筆を以て  
 大方の示すまの之のまをいけんも筆者中歳  
 を得りしハ流石に及故も有り一子世傳て、愛に  
 出ぬすことハ

昭和二年六月半迄

牛込矢野の儀寓に於て  
 春城 識

○前月魁界大恐慌の時取付に出思つた大折のあつた  
 のこときハ日脱性を経験絶無の事じあふから信  
 用表示一意に苦業時間係いらる金の仕拂  
 ともと社長も命したの夜に入るまは仕拂  
 つたの流石に又上げた日よあつた此頃あ  
 田舎者次らも今もとかければ、~~田~~苦業時間を  
 無視したことの取りよふことハ無つたといふ  
 一時方こう延びると追々野次馬も老つて来り  
 種を来すやあつた。他の報りが仕拂をやめて  
 其の門前寂寥とてあつた。ひとり大勢を引  
 つけてあつたと、是か馬鹿に目まうて、あ田が一審不  
 信用にあつたか、如く、少くとも外見うそを理解

七三二一ヤリマ御付、切角厚紙的ニヤツルこと  
面白くさういふと云ふもあつた。亦あつたの流しの  
或ハ料紙屋の主人が十萬圓の預金を引出  
し、来にあら、そんを海さんとして机の上  
に紙幣を積上げ、そんを見よと預主がめ  
何にも量の大さ、喫飯でも持てくつて  
も行め、割するよ、左支取人、どうか、えんを  
貴君の預つて貰うらひといふと云ふとある、  
行も、個人が信用あるか、見よ、これが、  
前後の、別ち、あつて、申出した、も、  
とある、他も折角受取つて、えんが、えんも  
持て、帯して、ゆくの金、中、の、危、険、を、あつて、一、  
二、

家、に、ま、つ、て、こ、と、が、危、険、な、ら、し、め、る、紙、幣、を、  
思、ふ、に、色、人、が、改、め、給、ふ、の、危、険、な、ら、し、め、る、  
と、あ、つ、て、い、ふ、と、預、け、主、が、引、出、し、の、前、後、を、  
ふ、の、で、校、精、の、徒、の、自、家、の、番、籍、を、あ、つ、て、  
他、の、漢、字、に、あ、つ、て、い、ふ、と、あ、つ、て、  
の、十、親、を、預、け、と、あ、つ、て、い、ふ、と、  
預、け、主、が、儲、け、を、あ、つ、て、い、ふ、と、  
道、理、あ、つ、て、い、ふ、と、  
計、方、が、決、定、な、ら、し、め、る、を、流、す、る、の、善、も、  
と、あ、つ、て、い、ふ、と、決、定、な、ら、し、め、る、の、  
と、あ、つ、て、い、ふ、と、  
初、め、か、ら、  
か、つ、て、行、な、し、  
を、流、す、

かけ、聴く、悔く、まい、ことを、下の、行、災、の、友、感  
 七、自、死、起、る、譯、心、あ、る、美、の、應、接、の、衝、こ、あ、る  
 と、の、人、罪、加、あ、る、譯、心、あ、る、い、あ、る、人、の、歎、息、祈  
 り、人、生、死、の、行、災、と、ま、る、い、あ、る、の、自、命、の、子、孫、に  
 遺、言、し、る、祈、行、災、な、る、ま、る、を、欲、し、ま、い、と、い、ふ  
 九、の、日、七、美、の、此、の、消、息、を、傳、ふ、こ、い、ふ、あ、る  
 〇、六、月、十、日、在、美、信、本、部、：、回、書、即、答、合、あ、る、ま  
 報、行、し、過、る、悔、の、こ、と、と、悔、お、の、悔、者、を、し、得、る、不  
 左、の、め、し

寄本類

一、まのおもてづけ

一冊

有観の古園を寄しつゝの

川崎のふ虎自筆本

一、殿門集回

一冊

終、善、ボ、も、殿、門、の、形、式、を、集  
 め、る、こ、の、ま、精、意、を、見、る、べ、し

一、禁裏物語

一冊

林、亦、重、治、不、各、意、を、細、考、し  
 る、有、観、を、し

一、隣のはろ

一冊

外、回、の、深、海、記、を、集、め、る、の、こ、の、ま  
 こ、の、好、意、を、し、神、田、春、子  
 の、家、より、出、づ、三、級、山、慧、照、院  
 の、印、記、あ、る、卷、尾、文、化、十、一、年

渥美氏正美七十三歳字方久  
とあり

一 小判製式圖式

一冊

小判を製造する用具を圖し此  
の圖也神田房平の作とす

仙遊書

一 蕪村句集

二冊

原稿をくも凡葦の板下巻  
首に蕪村の序あり此板木  
山年表を保存せんやとす  
つふと今に記し

一 仙遊百人一首

一冊

仙遊の仙遊を以て百人一首  
と稱し其の序あり田中克勤  
鳥尾十路左、杉本七郎  
才あり、句は百餘の改の  
ニ録し、指板の下の花家  
の句あり、永移の校合を  
記すをくも 刷子に記し  
種々の注り文を記し雌黄  
を以て充つ

一 げいしや

一冊

佛人ジョージ・ロウソウの『愛国』  
千八百九十年とあるが、明治廿四年  
の地と見へる。すくなく著者の生没  
状態を描き、今見ればその致  
味を感ずる

一 英文詩集

一冊

スプリット、オズ、ジャパン

米宣教師の『アルファベット、アドルフ、スタルジ  
の』の著者也。サンフランシスコ版  
明治三十五年刊行。日本風の字  
を多く採り、日本の施設を詠

十二  
東洋

と歌あり

一新装束草紙

一冊

一新装束の種

一冊

セ、ヘルリ海来の時の評判をおか  
し、書きしめるもの。洋人の國あり  
姓名あり、聖國記あるの姓名  
あり、蓋し船大砲の國あり、献上  
の國あり、南島の歌あり、今こ  
れを讀め、噴飯と稱す。得るものあり

一 芝居年中行書

錦田  
傳帖

一帖





# 藏書票の話

その起原は十五世紀  
愛書家の趣味さまざま

「わが蔵書の一品」といふ意味  
である。その意味では日本  
の「蔵書印」と全く同じであ  
るが、これを趣味的に見ると、兩者  
の間には著しい差違を見出す。わ  
が蔵書印にあつては大部分蔵書家  
の姓名をのみ印して、余程こつた  
人でも書體をかへる位に止つてあ  
るが、エックス・リブリスはそれ  
から見ると遙に藝術味を含んであ  
る。それから前者は書籍に直接捺  
印するのには時に扉の背紙や書背  
の各或は題名等を損するところ  
があるが、後者はその名の示す通り小  
なレツテルであつて、それを主と  
して紙裏に貼付する。従つて本  
の體裁を損するやうなことはない。



のブラックマニアの間、流行し  
けて来た。それが千遍一律な紋章  
の様なものから、次第に藝術味  
を象徴したものに移り、やがては  
それだけでも藝術味豊かなすぐれ  
た圖案等を用ひる様になつて来  
た。



日本に貼るのが正しいと成る。何  
れにしても、限卷直ちにそれは讀  
むものゝ眼に觸れる場所を選んで  
貼付される。だから所有者の誰で  
あるかは勿論、ハッキリ印象され  
る様なものでなければならぬ。同  
時に讀書の快感に適合しない様



なものでない。それだけその  
デザインはむづかしいものとな  
る。

も大分出来てゐる。エックス・リ  
ブリスもそろそろ普及されてい  
る頃であらう。挿圖一は内田眞の  
文字を繪畫化したもの二は帆船三  
は木村莊八氏作内田氏の蔵書票

倫十五枚を収め、内容ハ大君提灯、  
感亭子、くどい、舞、樂、入、  
紋着、引幕、木戸の儀、  
聲寄、式、塙、釣、提、灯、序、開、技、  
露、目、上、さ、し、ん、ん、お、目、見、  
馬、里、礼、人、呼、代、也、  
懐、の、あ、も、か、ま、ん、て、は、戸、せ、を

倫十五枚を収め、内容ハ大君提灯、  
 感享亭、くろく、流、舞、上、樂、入、  
 紋着、引幕、と、上、木戸、的、儀、  
 舞、寄、七、の、式、塙、釣、提、灯、序、開、技、  
 露、目、目、上、さ、し、ん、じ、かん、お、目、見、  
 得、里、礼、人、呼、代、也、旨、舞、あ、り、な、り、舞、  
 を、習、得、の、あ、り、な、り、ま、ん、じ、に、戸、上、を、  
 ろ、り、ま、り、と、す、  
 十二

蔵書票の話

その起原は十五世紀  
愛書家の趣味さまざま

蔵書票(Ex Libris)はラテン語で「わが蔵書のしるし」といふ意味ださうである。その意味では日本に於ける「書印」と全く同じであるが、これを趣味的に見ると前者の間には著しい差を見出す。わが蔵書印にあつては大部分蔵書家の姓名をのみ印して、余程こつた人でも書體をかへる位に止つてゐるが、エックス・リブリスはそれから見ると遙に藝術味を含んでゐる。それから前者は書籍に直接捺印するのでは時に扉の背や香背の名或は題名等を損するやうであるが、後者はその名の示す通り小さなレッテルであつて、それを主として紙裏に貼付する。従つて本の體裁を損するやうなことはない。



のブラックマニアの間、流行しかけて来た。それが千遍一律な紋章の様なものから、次第に讀書趣味の象徴したものに移り、やがてはそれだけでも藝術味豊かなすぐれた圖案等を用ひる様になつて来た。

日本では愛書家が單に便宜上一何種の印を押して行く一方、ヨーロッパの方では愛書趣味の極端に表現した美しいレッテルを所蔵の書籍に貼付して来たことなる。日本に於ては力も致したが、つひにこの方面には及ばなかつた。更に家刻の如きものは非常に發達し



エックス・リブリスはまづ大きいもので方三寸を出るものは少ない。その僅な處に蔵書家の趣味を現す譯である。西洋流にいへば、この小さなレッテルは表紙裏に貼るの、普通とする。更に日本蔵書界にやれば紙裏、返しの際に貼るのが正しいこととなる。何れにしても、開巻直ちにそれは讀むものゝ眼に觸れる場所を選んで貼付される。だから所有者の誰であるかは勿論、ハッキリ印象される様なものでなければならぬ。同時に讀書の快感に適合しない様



知られなかつた。デザインを考慮しなければならぬといふことも一つの理由であらうが、讀書趣味が普及されなかつたとも大きな原因である。讀書趣味は今多くの圓本の洪水と共に急激に普及されやうとしてゐる。蔵書家は俄にふえるわけである。更に、馬琴自筆校訂の讀本や「日本永代蔵」に垂涎する古い愛書家の他に、明治大正に出版されたものゝ初版や絶版物等に注意する新しいブックマニア

も大分出来てゐる。エックス・リブリスもそろゝ普及されてもいふ頃であらう。挿畫は一は内田眞の文字を繪畫化したもの二は帆船三は木村莊八氏作内田氏の蔵書票

の半峰を人若しと云ふは、その方の経歴談に、其  
 日原稿もさしと余とが補注することあり。さ  
 らに未だ五枚あるを、追々二週して来り、自ら  
 七期から数時をも書き、補注の附箋を可なり  
 とせり。④加くと、淡々味、の経歴を略す。因う  
 てみる、自ら口をばし、自分の経歴が、あつた  
 やうな筆の、いろいろの能事を加くと、実を  
 高田氏の言ひ漏くし、此を補ふのが、執意が  
 あるのだが、従つて、自家の事、も及ぶのが、勢  
 がある。何ゆゑか、この筆、術、方面、のみ、附  
 注してある。其、存、に及ぶ、のみ、私、が、遠、慮、し、ん  
 書、か、ま、い、と、う、と、⑤補注の丸切り、さ、う、い、ふ、家、が、多、く

こうして、自ら、麻、寒、を、観、た、あ、つ、た、の、記、事、の、自  
 分、の、交、渉、が、あ、つ、た、あ、つ、た、と、其、の、経、歴、を、保、し、て、此  
 古、の、十、月、と、出、版、さ、う、い、ふ、筆、に、あ、つ、た、自、分、の、見、え、系  
 稿、の、記、事、廿、三、年、海、軍、開、校、の、後、ま、い、だ、い、心  
 あり。

六月二十の記



の記十年、第四郵便聯合  
 十年、あり、記念の印紙  
 枚、お、く、六月廿日。

○坊間、教業しと左の者を贈ふに依り

一東抄

一冊

世方の江に名所圖を多く挿みたる狂歌  
集り、繪の多彩色をかくりたるを  
往々出づ、余七一をを花す、而して  
狂歌を存する原摺を云と稱し  
古くとも彩を施し繪の多  
出づるを云ふべし、南時狂歌らるる  
繪を殊重しなる歎、此書無彩色  
るる也、汚損するも佳也、價廿五  
圓

十二

○楠瀬日年、河部良山の自序年二百の寄  
贈を云ふ

一六書通

一冊

此書、欄心、良山坐花と刻するの巻  
首に、良山書屋跡、漢の印を捺す、篆  
字極めて在重、惜しいか、上巻と  
跋き、上巻以下を収め、良山、浪  
葉舟の家、刻家、一時此界、霸  
と唱ふ

一蘇氏印略

一帖

ふも六良山自家の印箋を貼りたる  
このまゝ張嶽の印の注に良山堂温  
記の署名あり、張嶽に張嶽印  
譜の署名あり、良山之れ、枕の稿し私  
淑しき也

此二程家存の印者おほく加へし

○楠瀬日年と流次者画の事と及ぶ日年向  
の家利家の一癖と云ふべきは書畫と爲し何  
をも名揚る者史の見るとも印を尋るるとも  
たゞしとあるべし又云く家利家の顔肥を  
離んといふ配字と刀の運用多し土味のお

抱の家利家魚生・の石の送書と一し傳の印  
紙の紋の巾巾と云ふは時々又と云ふ印面  
刀を揮ふことと云ふは軍び、屈曲と云ふ  
刀の法に倣へり、食事を云ふは家人の持軍  
膳部の中の皿椀等を云ふは配字の心算  
氣味よくありかゝ置居たりと

○ゆゑに出版せんとする余の題筆表紙は種  
の表紙に乾き日年一葉と余とすはあ、同く昔  
し浪集に用ひたる蚊帳の色七糸の大小不同る  
る表紙に用ひたるは紋味あり殊に價甚しき  
るて大阪に之のそと板小間屋あり是許より  
元字のを得ししと、余心動きその見本と又人に

とを未だ又孰のしりく攸帳と志紙の抜料  
とするの夏向うと又思ふ、アソくの批評を  
拙作するも道すと主其共れり

○未刊徳業百種亦冊に三場おの廊考と収  
あや：世に撰覧の深る語あり皆其を省く  
ぬ吉家散元このきわぬ、照今うて其の欠を補  
い、人として、應接に托教をうて、依つて左の印刷物  
を秘し、ま、能布し、煩を解く、左て其の印刷物を  
めおく

○大畏念、雁庭園中、日、招、總、殿、を、置、  
かん、と、する、こと、の、前、も、お、お、き、さ、う、三、字、古  
碑、中、の、ま、集、あ、ん、と、楠、瀬、日、年、に、居

一九頁 三行-四行 三ツつゝはかゝさ

一九頁 六行 ひたものにかゝり

一九頁 八行 ひたもの

八二頁 三行 ふいて木枕氣を付てさせてやる

八二頁 三行-四行 させてにならしやんせよ

八二頁 五行

うへ、乗なら棹でつきや棹をとりや

八二頁 九行 出しかける

八二頁 九行-十行 だしてにならしやん

八二頁 十一行

あしをからめばけはむくくと

八二頁 十一行 なめかける

八二頁 十一行 なめかける

八二頁 十二行 なめてにならしんよ

八二頁 一行-二行

秋は茸かり大松茸をぬいたり入たり籠の中

ヨヲ、イ、い、れ、て、に、な、ら、さ、ん、せ、よ

八二頁 三行 しめてやれ

八二頁 四行 べてにならさんせよ

九八頁 二行 床の内の

九八頁 七行 を腕づくで交りに及

九八頁 八行 犯す事を

九八頁 九行 一穴道あらば

九九頁 一行

閨の事は女郎のごとくになすものにはあらず

九九頁 六行-七行

若衆の閨中の段は女郎に交わるとは格別ちが

ひて、淺深を用ひず、只淺而已にて其樂しみ  
深き事あり

一〇〇頁 四行 彼ノ所を

一〇〇頁 八行 牛房の切口

一〇〇頁 十一行 床を

一〇〇頁 十一行 いやと思ふ時

一〇一頁 二行 床の段ニ

一〇一頁 二行 月ごとのさわりなし

一三二頁 四行-五行

床の内、彼事をよいさい中にやくそくせられよ

一三二頁 床の内のしこなし

一四三頁 三行 床入

一四三頁 三行 床入

一四六頁 七行 床入

一四七頁 三行-五行

床入の時はかの所へあなたからしめりをつけ

らるゝ也、客の玉くきへも付て下さるゝ也、

節々逢てはあなたの彼所へこちらから付たる

かよし、しめりの薬通和散ト云

一四七頁 七行 床の内にて一儀を

一四七頁 九行 一儀の

一四七頁 九行 かの事をさせぬ人あり

三五八頁 九行 床の

三五八頁 九行 枕は

三五八頁 十二行

寝ておびをときはだと肌ゆもし單へを

す。夏承碑に「振魂」の二字あり。又「夏」の字を  
欠く。別に「二風」と云ふ。夏承碑の「夏」の字は

振魂

○六月廿二日。山伯(志歎)初め。早稲  
田大寺、来り。伯は早稲田の校宿。是れ余の伯  
親交あり。是れ抜幹部と云ふ。余も伯を仰ぐ。  
○恩物館。貴客を招き。三萬の恩物を  
永く記念する。此館を築き。是れを伯に  
告げ。此の御恩を伯の轉旋に出す。こと  
を反の夢し。おんハ。伯に託す。余も。休憩  
の後。新田寺館。ある。伯の。團。書。庫  
。読。書。を。伯。の。後。余。が。伯。の。類。の。あ  
。る。一。室。に。茶。を。供。し。伯。の。室。の。路。ある。心。き。夏  
。の。志。士。の。書。墨。の。此。館。に。掲。げ。て。其。の。長  
。の。香。茶。を。献。す。と。余。も。其。の。長。

大隈令彼とある内して連築中の紀念講堂の大意  
を弄し、十二時公衆に程し洋会を興行し、種々雜  
談を交へたり。

食卓上程々の話流清く、伯岩会大使に随侍して歐  
米に到りたる際のことと語り、到りて日本入路に  
しやむれぬ冷めしよかと招待するものありしが  
黒人に招待せんは其時池袋の福池澤下  
と挨拶をすす、介しと岩会大使が命をさすこと  
福池の立上つても何も語りても見方む解し得ぬ  
と事もくいつて、出籍日目に日本のエウ  
イことも思ひ存今と吹聴し此のおおし  
かつ福池とすすむ家来もも拍と言

ふこととく、日目のコウくクロンボ共といふ  
神子ひ、あり極達ハ我等を何んと思ふか  
るを、進め立てるのがあるから、即ち座を  
けし謝礼をさす挨拶のハ、概頭徹尾是  
人を罵倒し果つたのである。

福池と親しむ又語る、あの人お幕府の小吏が  
あつた時或る地方の総領にやとると其家の  
娘が給仕に出たのを捕へて今夜のどきとせ  
せん、あをうまは洗けとも、いやはやくいふ私せさ  
るを襖紙に家の主人さる父が怒りをおけ  
おさすけ申せといふ此とい福池の自白といふ  
か多の次多考氏卑か役人の命に従ハ福ハ



然不利が生しれから、斯ることもあつたのひあ  
こと語らん。

伯又曰く福地、細君に梅毒を投じしに、細  
君の面部に吹き出かをもせし醜く、其時  
つらみ、弱り果て、真逆殺す得ず、折か  
ぬが、折くは天氣明かする日、上天して貫  
らむれい、そのれと云ふこと語らん。

○梅井忠温(砲兵少佐)が書いた砲銃の考案史  
を讀んで見ると、其の二、或るころ、大山岩が大砲の  
考案(家)として送す可らざる史蹟のありはことと  
云ふ、彼人の二三種自家の工夫のよきもの化つた

といふまゝに、其の供へる便利と感ぜんとす、其の  
砲は、大山の名か、命をうけた、弥助砲が即  
ちそれである。弥助の考案の通稱である。大山  
は善佛の號なり、七日堂ともある。砲の研究の爲  
の洋行の古しきもの、日本の初めを火薬物志(考)所を  
起し、此時より多量長官の考案あり。後の、廣く揚一  
壯、張りの北人の大砲より、けして、今までの聖人の  
考案の、新と若くも考案あり、思ふ位がある。  
大山の考案も、薩の出身の、薩の考案の、砲漸や  
砲の考案(考)に力を入るに、佐藤もあつたから、其(四)二  
大山の考案も、人の出たの七種、其(四)二の考案  
考案、以下梅井の考案、その考案を考案する。

島羽伏見の戦ふるびの四斤砲といふ先込め  
の青銅砲と使つてみればある、大山さん砲  
兵隊長ともこの四斤砲六門(三門の二  
小隊)を奪つて奥州に奉送せしむ  
ところが大山さんがこの大砲が戦争をしてみると  
三年康の砲心大山さん新案の大砲を鑄造  
し、この大砲は四斤砲よりも射程が遠く、つ  
まらぬ遠方(砲心)より上偏流分盡し、氣  
象の加減で砲の偏するのを修正する器械を  
ついで長とといふ可き精巧なるものである。  
其の名を「長四斤砲」といふ、この砲は銅砲の

ある。

北長四斤砲ハ我陸軍切この大砲として西南戦  
争より海軍七號砲も皆之を使つてある。  
大いど極まるといふのである、海軍は此の長  
四斤砲が陸軍隊員として採用をつとめ  
この砲  
大山さんハアメリカから来た砲術書を見るに  
新式の大砲も二支した。大山さん  
ハ長四斤砲の外に十二斤砲といふ大きい  
大砲を造つた、この砲は銅砲で砲身が短く  
大きく、物の蔭から心も打てる大砲である。  
尤も七斤砲は古く和製であるから入つておれ

美ハ射程を及して、射角と主薬の分量を  
へまけらるる。板に比く大砲は、美ハ  
六十度、四十度、三十度といふ三枚の射角  
がある。美ハ射角毎にいろく、薬を(目分量)  
と使つて彈着の遠近を固つたものである。

大山えんは日本の大砲方々えんを面倒すは又ハ出  
来ぬといふ。射角を四十五度の二固定し、薬  
量に十二通りの種類を打つこと。美ハ  
上砲といふ。甚の上、乗せをゴロく引おつて  
おれり。車の上、振おけり。こと。此のハ大砲  
は新装のてを、今ハ歩兵の面倒す  
観測を、大砲を打ち、おつ。砲兵の試

射す。観測す。おつやう。さくさう。此ハ、  
大山えんが一射角に打たれる。今ハ、  
考へん。彈の中、おのが思儀るもの。

この十二斤砲を俗に「強助砲」といつてみる。全  
く大山強助(重)の獨創たるものといつて、  
一説に長四斤砲と強助砲といつてあるやうに、  
長四斤砲も十二斤砲も、大山えんの頭から  
出たものか、大山えんは主流な技術をいつても  
ある。

白毛の火薬を西洋から持つたのも大山、善徳就  
年の観測中、砲彈裏面の中心に、眠を食

ほう、あんの無感定の男かといりんれのも大山がある  
 このすい仲介の手紙もあると、大山が後に陸おこころ  
 れのハ陽光のまん。

六月廿三〇記

越後遺聞記

越後獅子の事

藝は三十通りもある

一案 山子

西浦原郡月瀧村を本場として、  
 最清し買りと共に全国的に知ら  
 れてゐた越後獅子も、今では瀧  
 落して却つて越後には影も見ら  
 れぬのみならず、総外にも勢力  
 を失つて唯畫家の筆などに時折  
 姿を留めるに過ぎなくなつた。

越後獅子の起りは應永年間、蒲  
 原郡月瀧附近は中ノ口川に瀧し  
 てゐたので田畑に水害多く、住  
 民の生活が困難に陥ることも往  
 々あつた。それを憂ひた同村の  
 農民角兵衛といふものが、その  
 子共と獅子舞を教へ、農桑の傍  
 ら餘方へ遊んで勸進させ、凶荒

の時、賑賑せぬやうに舞め備  
 へたのが發端で、角兵衛獅子と  
 もいはれるのはこの故だとある  
 それが江戸へ出た始めは寶曆五  
 年の頃で、瀬原獅子と唱へて舞  
 龍前送は藝侯にも召され、獅子  
 冠りを演じて少からぬ金を得た  
 が、誰新後は名も「龍業後獅子」と  
 唱へてゐた。

又、月瀧には毎年五月二十五、  
 六の兩日に地蔵祭りがあつて、  
 この日は菊も獅子舞を渡世に  
 するものは、たとひ遠國へ行つ  
 てゐるものでも總て集まつて來  
 て三軒ある各家元に出し、  
 それから諏訪神社の境内で、い  
 づれも藝をするのを常例として  
 ゐたといふ。

○六月廿三日 神田：散策心賦の墨帖を得、こ  
 れ未の全公架守りありきよのありと稱す

一 那須山漫遊の風景

一帖

北者帖寛政十一年刻す不立原御宗  
 軒の跋あり其序に徴するに下野那  
 須湯原の神祠有寔大井敷馬の家  
 心賦の初稿を存するゆゑの士温  
 るに返すことのみも其家：親し  
 北者といふといふハ詩日と稱す  
 ハ序あり、卷末に吉田尚典が全  
 本墨帖の細言一語のありを附す、日  
 本墨帖の一枚とす、一し、此の游

のまゝし心張當りも奈須に刊りたること  
を知つべし以つて其條を補ふの料とす  
べし又其の詩行に此詩を溯分は之を  
を補ふ所のとす

○大段の海邊を重尋の遺者を北段と云ふは  
札の馬廐にセリ上つたのうへ一敬つて此中  
大なる五所ハ重樞大を十二冊延寶六年の  
刊行せ画の菱川の重と傳くを云ふ論入  
地誌その内より重樞觀のよみである此類  
の圖書は今價を出しておるといふく、こゝに三  
千円以上は後札したといふ外ハ無い長松

福令儀の大札が二冊に二万圓をいふ人を笑はせる  
ハ重樞を重尋重尋が手に入れた時の價は二十  
五圓といふく入るといふおかしきことである

海邊に重尋の大段、おれは説家より年款  
かその書集わがごとくして重尋（此人がある、札の  
の後書札を重尋に附したのが全部、二十葉  
四の價があるといふ聽さるに、半分はわが  
重尋の福令重尋大回書物に物し、八分は  
主たるの約ある程に重尋ハ二葉四位ある  
か重尋の重尋重尋といふ書林の評判はあ  
つたが、札元の編り主が程列ひあつた為め  
倍額と上つた、此重尋の程の目錄、重尋家

花のよを點を打つて見ると百種以上ある  
家持のよも多く軟種があるのよもあるの  
よ石點を教へ得る譯ハ、いろいろ混して  
あふからむ。見ると一も珠をのよひは  
いの地

○天謀を都の支那斑陸軍少佐永見俊徳と  
いふ人の清めを地味文の協力を支那以今の  
説多に聞かす一場の清談をやつて貰つた。  
永見ハ教多祝意中「指」いんも「固」固に授  
せらん死刑の宣告を受け比のが、ある年あ  
が助かつた人がある。此人の話話の由より可笑しいこ  
とがある。ある日支那の兵士が三三五五作集まる

とある所へ行く。録々新紙を紙に包んだよを  
つとめ、自分か、面白いよを見せようかと云ふから  
又云ふといふと、紙包を開いて示し比よの何れも  
男根を切断したよあひあつた。云ふまゝ云々  
死刑囚から取つ比よの何れも、斯くのよを  
不持してあるかといふ。こんを指さる。云ふんは  
お市の價、云々からある。役者が葉巻を電流  
をかけた交際してあるのよを「やく」と、百田はせよ  
ハ十田云々買ひます。云々云々おれ、支那の  
婦人の月経の痛に用ゐる葉巻。此材料  
が要すること云ふことだ。支那の兵士、往々給料  
を受けずのいから、こんを内職をやらねん。云々

校車は目前に見えおぼろげなとち制止し一きいの、無  
給料だからと出を得るのがある。

○昨日日清印刷会社へとう早稲田文字  
系へ出版部へ教職者四十五名をお出の一日  
玉川遊園の清遊を試み余が郊外に遊ん  
ぶ年去稀なる玉川を遊ぶが初め  
ある先の新名は電車に乗る、田子  
川行電車に乗換、澁谷まで更には玉川行  
電車に乗る福を、此の休り電車乗人を  
以つてえら、三十分おきも得す、漸々  
達して又ある会場の定められたり、  
三流の亭也十一時迄、友人皆母着、五

社にして祭禮には古來盛大なる在りの催しありて今日に  
及び神靈に叶ふと云ふ

金玉八幡宮——金玉櫻 源義家後三年役の歸途澁谷城に宿  
りたるに因みて八幡宮を勧請したる社にして後年頼朝其  
父源義朝の侍臣澁谷金玉丸の忠節豪勇を偲びて其名を世  
に傳ふべく社の瑞籬の邊に一株の櫻を植ゑしめ金玉櫻と  
命名す

青山忠俊春日局等主家の爲めに祈願を籠めし宮なりと云  
ふ

圓泉寺(太子堂) 聖徳太子の立像十一面觀世音の木像あり  
て尊崇せらる境内標の太木あり樹齡四百年幹の太さ一丈  
七尺五寸高さ九丈五尺府下名木の一なり

駒留八幡宮神體は半弓を持て巖上に立つの像にして徳治  
年間北條左近太郎八幡宮を勧請せんとし其地を相すべく  
騎馬にて馳せ駒の止りし場所に宮殿を造營せしとなり  
松陰社明治十五年毛利公官に請ひて社殿を創建し吉田  
寅次郎の靈を祀る

(松陰遺稿) 不拘蕪水不能成善農、不斷筋脉不能成善工  
瀧と命名す遊覽者の足は自ら彼より是れと知らず識らず  
園内を一巡すれば兒童の爲めに運動遊具の完備せる廣場  
に出で老たるは憩ふべく子女は得意に嬉戯するなり。

朱塗の高樓玉川閣百疊敷は其位置京都の清水舞臺に髣髴  
し而かも遙かに富士の高嶺を眺め脚下に小さく電車の走  
るを見る是れ全然無料提供の休憩場餘興場にして園内賣  
店は簡單なる食料飲料を採るに便に園基將棋の樂み唱歌  
俳句の會に誰れ憚らぬ清淨無垢の自由郷なれば家庭的清  
遊に親族遠來客の招待に同郷會の催しに新聞雜誌の體  
的娛樂に絶好に又夏季大學等の會場にも適す。  
グラウンドは學校商店會社等の運動會に使用せられ彩旗



第一遊園地

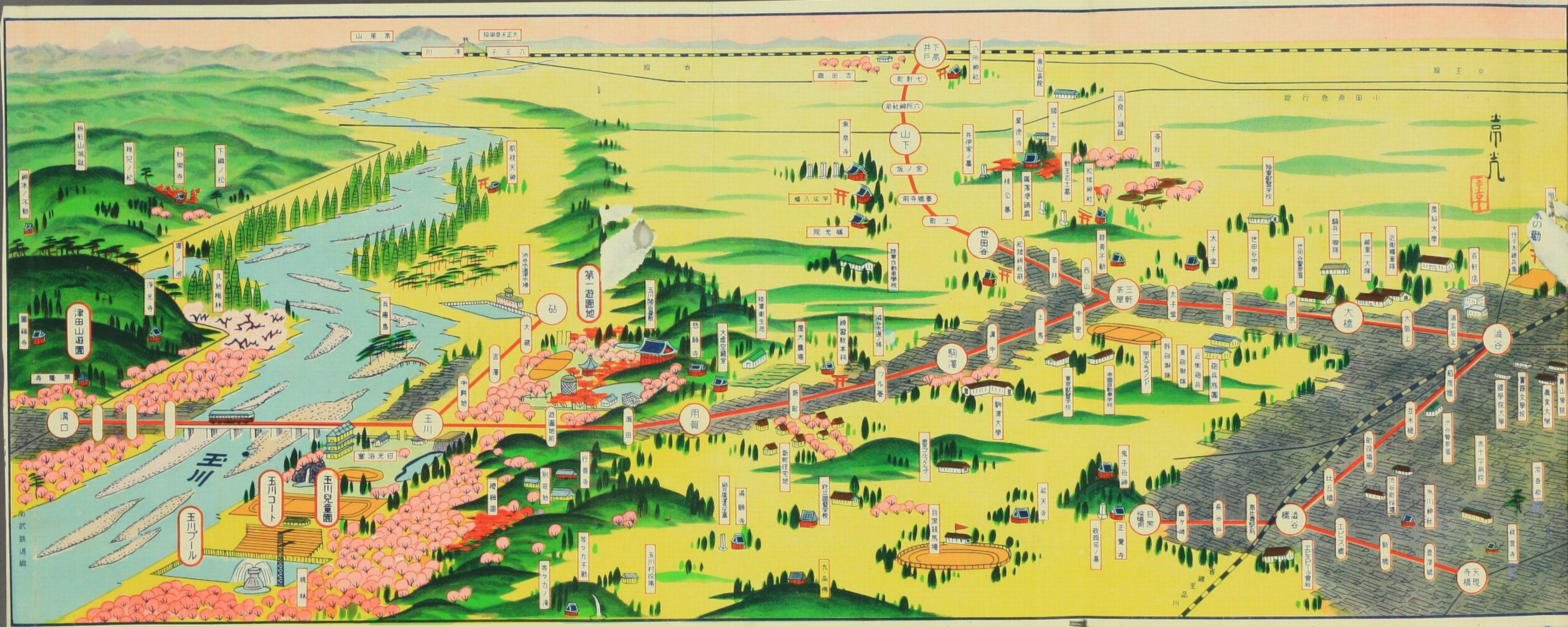
々雪花芳香の操を代へず獨り松林竹叢の間に自ら高ふす  
るのみ昔て成島柳北新聞紙上に紹介し一部人士の知る者  
ありと雖も交通の不便に遮られ花信東都に達せざるの恨  
み長年月なりしも今や玉川電車により天現寺橋停留場よ  
り時餘にして樹下に到るを得臥龍の老幹青苔愈々深く白  
瓣松竹の青緑と相映じ林間の逍遙丘上の伏魔實に近郊第  
一の探梅勝地なり。

春風雲濛白梅叢開説初栽元祿中老幹帶苔相踴躍落花滿  
地鬪群龍。

津田山遊園 玉川を越え直に迎接する丘陵にして天然の  
景勝東京近郊に比なく西南に遠く富嶽の群峰に聳ゆるを  
望み西北に筑波を眺め東南には東京灣の水光霞の中に蔭  
顯し脚下に玉川の清流、久地の梅林を俯瞰し玉川閣の朱  
殿、澁谷水道の高塔は前面の目標たり園は小丘の重疊し  
て一丘陵をなすものにして頂上平地多く變化に富み拓き  
て名園となり天然の儘を保存して而かも一名勝たるの質  
を有し一家行厨の遊び友人一飄の行樂に至便至適の場所  
なり途は溝ノ口終點より行くが表口となり久地梅林の坊  
競技行はれ記録的の好成绩を擧げしは世に普く知らるゝ  
處なり。

子供プールは噴水塔より七彩の虹を吐き下底周邊より  
も秋の薄に似たる噴水を爲し圓形の泉水は水深二尺にし  
て幼童の嬉戲銷夏に好適なり。

玉川コート 國際的水泳競技場なる玉川プールの隣地に  
して玉川桃園の眞只中を相し國際的基準に據りサンドコ  
ート五面と外に一面のローンコート造り更衣場、シャ  
ワー、洗面所、招待席をも設け専ら日本庭球協會の指導  
監督を仰ぎて聊か我が庭球界の爲めに盡さんとするもの  
なり。



山口県志 第十一巻 大分県志 第一巻







校車は目前に元々おぼろげな光景を呈する。其の間に、

遊に親族遠來客の招待に同總會の備したる新聞雑誌の贈體  
的娛樂に嗜好に又夏季大學等の會場にも適す。  
グラウンドは學校商店會社等の運動會に使用せられ彩旗  
の翻めき喚呼の聲四時絶えざるなり。

**玉川兒童園** は家庭本位の別天地にて總て教育的に施設  
せられ先づお伽の門より眺むれば巖上に桃太郎の勇姿を  
仰ぐべく門を入り躑躅の森を過ぐれば小禽舎左に驢馬鐵  
道ありて愛らしき兒童を滿載したる馬車が小山の周圍を  
廻る泉水の邊りに行めば向ふの汀に天滿宮の社其右手に  
臺の洞左手に太鼓槽を見るべし神橋を渡りて一々に之等  
の趣向を凝らしたる設備を閑すれば臺の洞水中に行進す  
る龍宮行列あり洞窟を出て四阿屋の前より智慧の細道に  
入り潺湲たる小流の邊りを行きつ戻りつし途中雀のお宿  
をも訪づれば遂に學びの淵に到れば清泉飛瀑の涼味自ら快  
感の湧くものあり飛石を傳ふて側背に廻ればお伽の國に  
入り乳房の親しみと共に皆人の心に追憶せらるゝ五大お  
伽のバノラマを見つゝ外に出づれば園内を半周したるに  
て此處より右方に驢馬鐵道の乗場あり左は桃太郎銅像下  
の大砂場にして白鳥の嘴よりは絶へず清泉を吐く砂場の  
横にローリング滑り臺を設く更に左して奥庭の運動具に  
遊び花園を眺め跡戻りして最新設備の三層樓家族館に昇  
れば三階には保健上斬新の設備に係る日光浴室を設け天  
井も四周も悉く硝子張りにして廻轉窓の開き加減により  
局所を紫外光線に浴せしむる如くし廣き露臺ありて多數  
ベンチを配し四邊風光の觀賞に便し二階には世界五名  
勝の藝術的バノラマ親きあり、一階には屋内ブランコ、ピ  
ンポン臺、輪投げ餘興舞臺を置き、屋前廣庭には數多のベ  
ンチ、バスケットボール、家族ブランコ、鬼遊び廻走木馬  
を置く。本園は兒童の心身に少しのあぶな氣なく知らず  
くの中に純真の趣味を涵養するを特色とす。

松陰神社

玉川閣とグラウンド

天神社と神橋

**玉川の自然境**

**花の玉川**

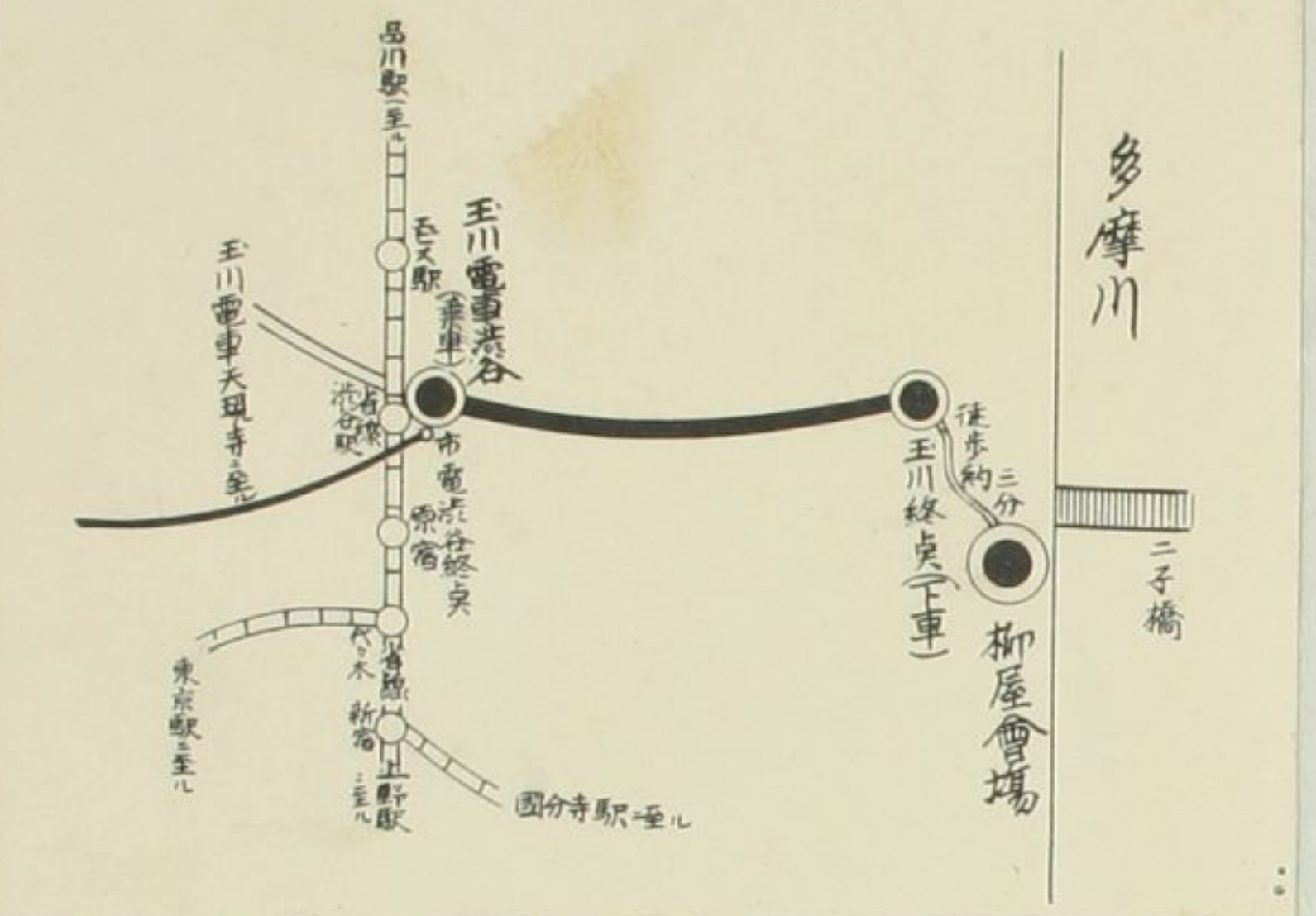
- 「梅」 久地川邊梅林(關東第一)、玉川第一遊園地
  - 「櫻」 新町住宅地、玉川第一遊園地、櫻楓園、稻荷坂
  - 「八重櫻」 玉川兒童園、第一遊園地
  - 「桃園」 兒童園、玉川ブール附近一帶、久地附近
  - 「藤」 玉川遊園地(房は五尺に餘る)
  - 「躑躅」 玉川第一遊園地、兒童園、神木不動境内
  - 「菊」 玉川第一遊園地、兒童園(共に清香會員なり)
  - 「摘草」 玉川田圃、玉川堤、砦、久地、津田山遊園
  - 「花見の高臺」 玉川第一遊園地玉川閣、津田山遊園、
- 夏の玉川**  
玉川ブール、玉川子供ブール、納涼船、鮎魚、第一遊園  
地玉川閣の青嵐、玉川製氷アイスクリーム
- 秋の玉川**  
玉川コートの庭球競技、兒童園日光浴室、玉川田圃黃金  
の波、第一遊園地高臺の觀月、玉川グラウンド運動會、  
砦の虫聞き、名物梨、柿、栗の土産物、魚釣り
- 冬の玉川**  
兒童園の日光浴室、富士雪峰の遠望、冬木立中の朱殿玉  
川閣、河畔の寒月、フロリスト會社温室の西洋草花、玉  
川コートの庭球競技

東京市日本橋區濱町三ノ五 日本名所圖繪社印行 電話浪花園八一番

夏之船を浮べし遊ぶ、前ののち、河がかりを  
七、八、浅く往き舟膠す、濁水の五般色を卸し  
目前に香魚を捕ふ、多く得る船のさし、七、船中  
割重む物とて身を得る、吟味するし、各船に  
ハ酒と岐を載せ、伝歌河を共敷ふ、余五人  
二十二人を載せし、舟船に、舟中峰岸士  
七、後れを刻り日船、乗る、真、乗る大い、飲  
お、各船、快とを、午後一時、船を、上  
陸、押、座、の、定、め、と、張、り、主、客、況、と、解、め、る、亦、膳、こ、つ、く  
席、上、大、い、賑、々、衆、皆、快、と、呼、び、皆、互、満、足、と、い  
余、こ、乾、き、し、八、四、時、さ、ら、う

回顧す。会社が創立されて二十六年の後同じ  
橋を祀る会を向島の神社の橋まつり（ま）と  
しことある。余は未だ其頃（この頃）の重役（じゆうやく）で  
りしが、祀（まつ）えんて（て）余の（この）居（ゐ）る（ところ）の（東海）  
筋の右（みぎ）の（橋）の二階（にかい）より（橋）を（あ）ら（わ）す  
感（あ）つて、（橋）上（かみ）に（お）も（つ）る（こと）を  
言（い）ひ、（橋）の（社）が（進）ん（で）（進）む（こと）を（主）流（しゆりゅう）  
と（な）す（こと）を（思）ひ（起）す（こと）が、（偶）に（郊）外（きやうがい）に（身）を  
（置）き、（川）と（流）す（物）の（ま）と（ま）り（て）（今）の（橋）  
まつり（は）（比）し（て）（愛）さ（る）（こと）を（主）流（しゆりゅう）と（し）  
て、（久）し（く）（古）南（こなん）時（とき）に（信）ず（る）（こと）を（主）流（しゆりゅう）と（し）  
社（しや）軍（ぐん）

鮎會御案内略圖

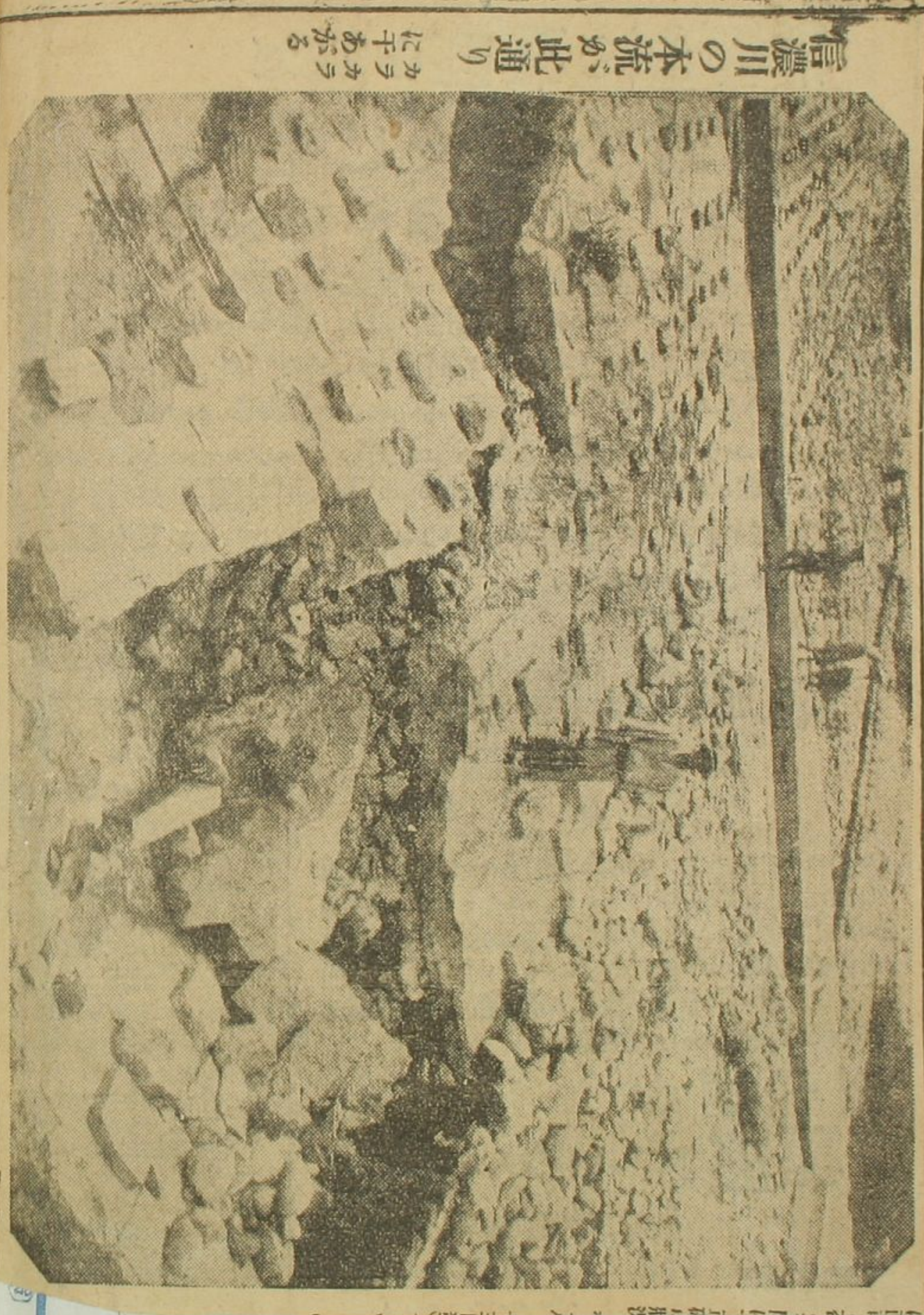


楠瀬四年。発しし印利  
此の放言長の関路  
珠の意に合す  
六月廿八日記



六月廿七日記

の進めと郊外地の賞に長に就く感なき  
能はさる也



信濃川の本流が此通り  
カラカラに干あがる

此等地方の未だ即ち雨師振りまき地の農家は皆半  
天に苦しい今相切りの新米に代流の河を流  
魚別心の方三つを捕りぬれ七末久くと無き  
所也  
二月十日記

○前月由着より中電田出身の画家が古井  
雪村の遺族の如流にて出入りし雪村の  
経歴を述べたことあり其大意のあつた  
記述の前者は：即ち其某流の如く  
を折らせし善徳も無かりし為の甘言を死  
する道もなきことあり其流の如く此の  
城とて委細な河の其の流をを得る  
左の如く

(1)

(一) 雲坪の佐藤は長井元次郎  
 (二) 父の名は甚六、母の名不明なり其実家は北浦太子堂の石山長右衛門と云ふ事也  
 (三) 次弟は廣五郎、末弟は末太郎  
 (四) 廣五郎は北浦通と云ふ事也成印は其跡の分  
 然し西洋家具店を有す其地(向地)の随一と納せり。

(2)

此を長岡と云ふは戸籍を得りて、後其は長岡を角長と云ふ、高橋が四角の角のトレタウの中へ長つ字をきせたり。又、後戸籍更ふ不見得ず。長岡と云ふは其の母はヤリ長井也、北浦た、戸籍を移したるは十三の年迄也。其際其を長岡と云ふし。しり。

(四) 甚六(父)は後雲坪が長と云ふしが戸籍は北浦の

(3)

理号を以て名くして死す、其後雲採の女ありは子ありし  
 あり未だ中を著し嗣子として彼女が是の命を嗣子  
 化し継ぎし四人の子ありし故、未だその妻も子も四人  
 以て世に生す  
 (6) 雲採が初回長由行は十五歳の時一處の同急百  
 得、医を以てするありし(脱走は私か)、先はあか  
 流を以てせりしとよは遊へ、錢別を文りたるに衣

十二

(4)

敷を以てし理由は途中行若う安んじ知く加安全  
 ありはとを信ありし如きなり  
 (7) 長由の身をかきし、医家の一解は、坂田法也(聖雲  
 とよま)の書に、他の一は石如、阿比は華山(紫野)  
 して其家にかき名多くを死したるなり(た、十五歳)  
 (8) 此の、坂田の限なりし錢別は就き、更に錢別

か決意に多岐しめたる也

い) 一旦吟詠せよ十八か九の次を、本人が医者にと  
ぬむと許す。近親病氣を口實に呼ぶ、本人の意  
をを加へんとす。

い) 世時は未だの世に當せん、母の実家也。早く父母  
早く死ん未だも母の實慮に川あり、休む聖伴  
ふ) 夫も其の如き也、併し世後混濁も果す、従弟長井

由治身方の帯をせよ、之は信のたまふしが、行馬の友なる  
医師あり、之は信のたまふしが、行馬の友なる

い) 混濁の世に當る、之は信のたまふしが、行馬の友なる

い) 七井地あり、一方あり、由治の分家也、又従弟二三人、今も

い) 世に當る、之は信のたまふしが、行馬の友なる

い) 夫も其の如き也、併し世後混濁も果す、従弟長井

い) 世時は未だの世に當せん、母の実家也。早く父母





(9)

しつと、マア、膳とてか人が御れも膳師は早ん  
 此中をゆく世に書きたりか等の事ありて一食位は地、  
 ちうーと御れは雲押は致しと書つたうしが格く  
 一と書きたりて今を身を時でいせとよの心、二三  
 五分と推してかた道に行方加ふさうし、其時  
 何故急い味びたさしとせめて同いぬ、雲押は居て  
 今の男は少し及ぬ女にあらさうとてうらや  
 へ

十二

(10)

ありあり思つておしまりを忘れたとソひたる  
 況能降征守は印時寺子のやうに道に立寺ありが  
 二十五年前後に印師の次、信書を描きて持出し  
 可成り也、二回目印師の時、地うに見長かうし、  
 先丁に寄ておれが、依て此う菊新の圖を描きに成  
 い、晴しが、そのう今は持失し寺に在、秘念ありて  
 今も物色申のよし

長井雲岫の書蹟を好む世は紛々たる如  
池堰巻(若四郎)と云ふ其後村松梢風  
中央公論紙上歸る詳細の記をもとに  
けり。余は右書を通讀して其書蹟を得  
其の折友人の長井鴻一と云ふ年若き人を  
伴ひ來りてあり其人を問ふに雲岫の才の  
子と云ふと云ふ他を識みざる事ほの事をも  
質す。尚他村松の記しる所と口異  
なるもの多し。亦其の記すに事蹟を言ふに  
せんが如し故に其書を考へて其書を考へし  
る事あるにや。其の師を脱走

せる時の多ゆの如き。市定異するもの  
ある家族関係をも詳を得ざる所も  
あり。此頃早稲田文藝社も此人の遺稿  
のつきやる所を望まん。不確定なることを  
重ぬる世に後世も其書を考へて其書を考へし  
るもの也  
六月廿八日記

○七二二 漢書八景といふをみて是れ其後書也此  
に似せんとおもひて漢書八景と題を改めし故に  
此書考へて見ると此と似せし後書の一境にあり  
所謂書蹟範圍と云ふ做すべし。其の如く  
かある。ある人の書蹟を漢の撰習の人がある痔

疾そやち人との刷に長るるがたはあのみえさやらの  
こもをゆりまにす物と書物をも後五人古あるや  
梓氏をもつらんかあつたやうと思ふ西洋のバス  
グツリといふ一種のものも出来てある位は浴槽へ  
を浸しつゝ漢書をする人がある日本書紀の  
又受けまいいけんも一類であるや、或の物を  
垂ぬのの漢書もある、（験射や牛に引きまゝでも或の  
来を揚ぎしうも）或の凡そ書物に懸りまゝのもの  
漢書もある人の傑とすると主人の地味何し、其の  
ゆるを待合せての漢書の昔も漢書時代より  
よくあつたことある、皆一の其味が異つてゐる  
へのらゝすゝて寸陰を惜む漢書は、勉學者家

のるす本と見ると、造つてあるのが得る所も書少  
くもあつて見るに測部が出来ぬか、異例があるから  
八境の外とすべきであらう。 六月廿の記す

○忘きり、往來しある印人柿瀬杓に日年の類  
かある其義を測つと恠いといふと測あか、（目  
録といふと）其の、坎庵の別類ハとすくといふ  
といふ異言、（碩加つければ）其の、（正意）其の、（正意）其の、  
してゐる、（正意）其の、（正意）其の、（正意）其の、  
り容器に、（正意）其の、（正意）其の、（正意）其の、  
も義があるが、（正意）其の、（正意）其の、（正意）其の、  
命いれといふたうい

○昔し湯桶の着版を矢を用ひることがある、今

島田金入あるとか、これらも射の義比といふ  
の財界の授けび

島田金入も十五銀行が  
行か鎖さんねの場  
二日本及口人  
も見ると十五銀行  
の沿革が  
西南就る  
も大功のあつた  
北銀行の  
のも見ると、  
今号の國は

### 十五銀行の創立及び其後

その華族が公債を賜はるや、夫を集めて、十五銀行が設立せられた。一千七百八十二萬六千一百萬圓といふ資本金で、一千六百六十六萬八千八百八十圓の紙幣發行權をも與へられた。同じく國立銀行と云うても、他とは全く異つた特權が與へられた。

- 一、十五銀行の紙幣發行額は、資本金の九割三分。普通の國立銀行は八割。
- 二、十五銀行の政府貸上金千五百萬圓(十五銀行の發行紙幣)に對しては、百分の五の準備金(政府紙幣)。普通の銀行の紙幣發行權にては、四分の一の準備金を要す。
- 三、十五銀行の紙幣擔保の公債は、最低價格を定めおきて、相場の高低をかへりみぬ事。他の國立銀行は相場が下れば、不足額を補ふことになつてゐた。
- 四、十五銀行は、一口の貸付額に制限が無い。普通の銀行は、資本金總額の十分一を制限とした。
- 五、十五銀行には純益金中よりする積立金の制限がない。普通の銀行は純益の一分以上を積立てることになつてゐた。

西郷戦争の明治十年の五月二十日に開業免狀を下げられて、

二十二日に政府へ千五百萬圓貸上の約束が定り、二十七日から開業した。西郷の部下が兵を率ゐて鹿兒島を發したは其年の二月十五日で、征討の詔の發せられたは二月十九日であつた。九月二十四日に賊軍は滅された。

十五銀行から借り入れた千五百萬圓は、即ち西郷を征討する費用の爲である。之に對して一割の利子を政府は支拂つた。初め明治六年西郷の辭職して東京を去つたをりに、遠からず戦争になるべきことを豫期して、政府は夫れに對する準備を種々整へた。其中の軍資を得る方法として十五銀行が立てられたのである。もし其不換紙幣を政府が自ら發行すれば利子はなくてすむ。十五銀行に發行させて借り入れて、利子を支拂つたは全くムダとも見られる。

其時諸華族の手にある公債が、もし西郷方の手に入れば、西郷方の力をつよくする事となる。十五銀行に公債を集めて夫れを防いだのである。

直接に兵力を出さないが、華族は資力を以て政府を助けたことになつた。華族もまた之によりて利殖することを得て、居ながら大に益を得た。たとひ西郷方に與へずとも華族の手に公債があれば、失はれ易い事情は種々迫つてゐた。國家が、利子だけはムダに支拂つたやうなものであるが、軍資を之に依りて得て政府は、其基礎を確立することが出来た。華族個人は之によりて産を全うし、財を殖すことが出来た。公と私と双方 利益はあつた。其後に精算せられた西郷征討費の全額は四千百五十六萬七千七百餘圓であつた。  
國立銀行の制度が廢止せられ、日本銀行を立て、兌換制度

が確立した後も、十五銀行は、普通の銀行として永く繁昌することになつた。其歴史、宮内省との關係、華族との關係、言はずかたらずの間に信用があつて、資本金も増して壹億圓にも至るまでになつた。其株券の多數は宮内省の所有ともなり、又華族の世襲財産の中にも列せられるものに規定せられてゐた。各地方の舊家、富豪が深く信用して、其株主によるこんでなり、進んで巨額の預け金をしてゐたも尤も千萬である。最初發行の十五銀行の紙幣には毛利、池田等大華族が重役としての名前が記載してあつた。この紙幣によりて宣傳が海内に行きわたつてゐた。夫れが一朝破綻せんとは誰かおもひ及ばう。其前夜の中に二千萬圓の貨幣と共に宮内省の金庫が銀行から皇城へ移された。十五銀行創立の事情は、皇后宮職御藏版の岩倉具視の傳の記載が要を得てゐる。

のめり市中に散策し一冊の福をこの

一地下城道も

一高架城道も

一郊外の休業札

一大量出版のピラ

一道路改善法

一ラジオの放送

一トラウマの撲滅

一高層の窓と時空の窓

一田舎自動車増加

一活動俳優の徐え

一モダリングの異装

渡邊華山設色賣茶翁圖 (絹本 條幅)

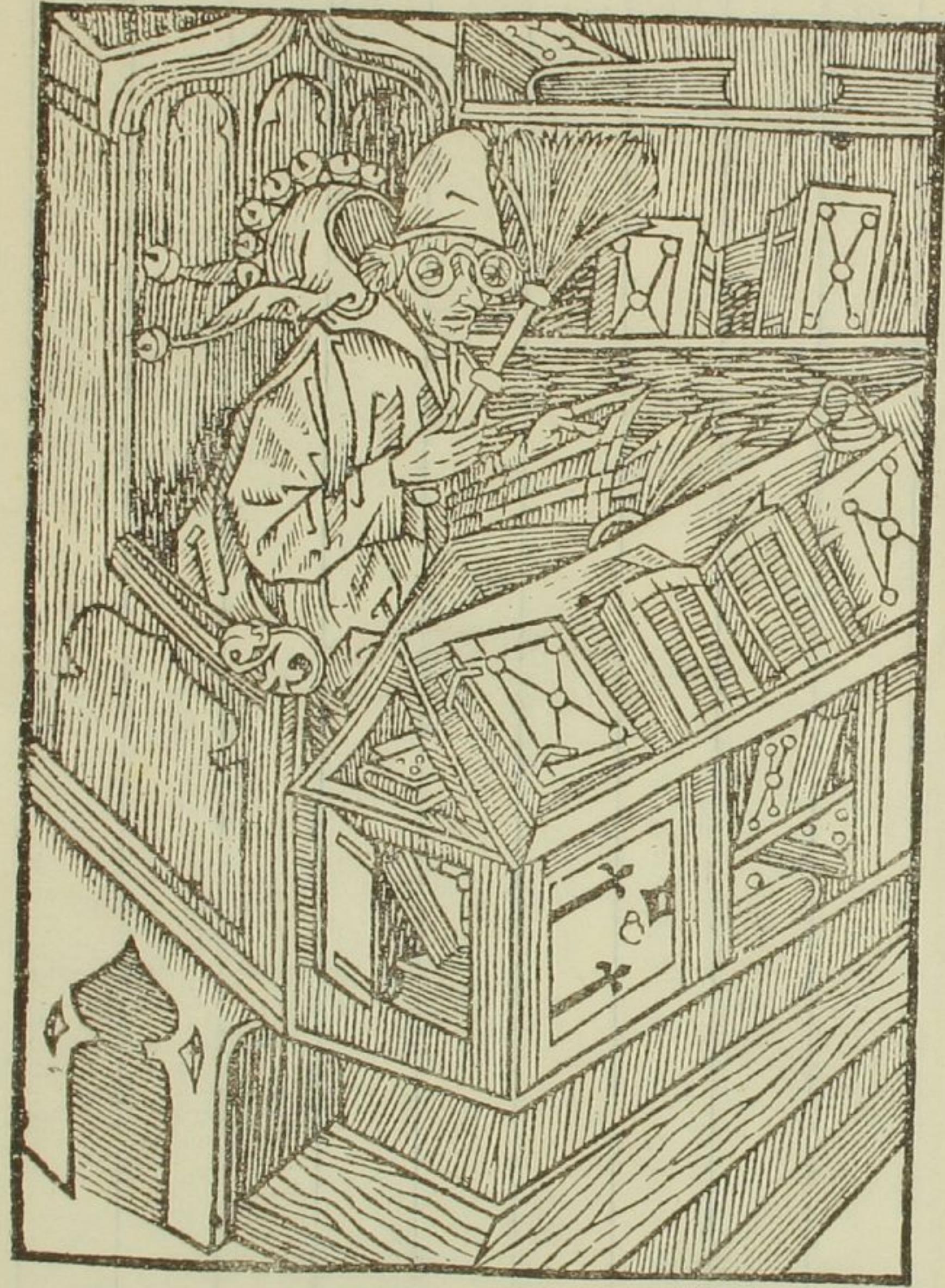
天保元年花月時日  
國平先生持筆 華山設色 渡邊翁



(本畫に就き三頁に解説を附した、参照を乞ふ。)

青森 佐々木嘉太郎氏藏

・ 屋本古の代時紀世五十 ・



一四四九年パーセル版  
セルバスチアン プラント 著  
"Stultifera Navi" 所載

口 繪 に 就 い て

掲載の口繪は、渡邊鞆山が彦根藩の家老岡本黄石の爲めに書いて贈り、以來同家に傳へられた名畫であるが、それについては奇しくも亦面白い一場の挿話がある。それは鞆山が一日、江川坦庵の爲めに例の大鹽平八郎の反亂事情に就いて問ふべく岡本黄石を江戸の藩邸に訪づれたのである。と云ふのは、平八郎門下の俊髦として聞え當時長崎に在つたのを呼び戻されて擧に參加すべく説かれたが、到底事の成らざる所以を説いて極力その不可を諫めたが爲め『獅子身中の蟲だ、先づ戦陣の血祭りに上げて屠つてしまへ。』と斬殺された彼の宇津木靜區は、實に彼黄石の兄であつたが爲めである。

その際のこと、黄石は美酒佳肴を以て懇懇に饗應したが、自らは些しも酒を嗜まなかつたが爲めに、苦茗を啜つてそれに相伴した。斯る結果、旬日ならずして鞆山が謝意として畫き贈つたのが、賣茶翁の圖即ち本畫なのである。思へば、當代の偉傑江川坦庵が世相と政狀とを知らうとした心境や、彼と鞆山との特殊の關係は言ふまでもなく、當代政界消息の一端にも觸れて居り、なほ且つ鞆山の謹嚴の裡洒脱磊落の風懷も偲ばれて、藝術的價値や歴史的意義以外にも、亦極めて興深い洵に好個の佳品と云はざるを得ない。敢て一言附記した所以である。

盛		繁		京		東	
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
大之三	シホ	ヨシ	本石	通二	本十二	通四	本十二
袋電	内藤	出雲	楠喜	小林新	和泉	須原	和泉
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
通三	キヤ	ヨシ	通三	室三	通三	上三	通三
岩喜	山喜	内藤	伊藤	長堂	江藤	山本	山本
同司	同司	同司	同司	同司	同司	同司	同司
申之	ヨシ	申之	申之	カニ	申之	申之	申之
正堂	大田	村上	慶平	高平	大倉	品倉	品倉
雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨
本伊	本久	本久	本久	本久	本久	本久	本久

載所『評組取業商品諸』

の神樂改むはる業をさるみ松ヶ枝専ら  
 知三心よりあつて其の家太の場を  
 主歎酒を長春の四文字を掲げしこと  
 あり其の酒を三階の酒を掲げしこと  
 亦神楽改むはる業をさるみ松ヶ枝専ら  
 家を構ひ、余の花を命やるとして然る  
 其の刻意のあり業をさるみ松ヶ枝専ら  
 丹精といふ格をさるみ松ヶ枝専ら  
 と呼ぶこを地をさるみ松ヶ枝専ら  
 ちありて何人七呼ひやすく、而も高野の  
 ちあり、割家と刻意の目をさるみ松ヶ枝  
 ちあり、割家と刻意の目をさるみ松ヶ枝  
 ちあり、割家と刻意の目をさるみ松ヶ枝

かばりつゝ酒友に謀るんはえふかふふじといふ支  
那の松に配するは牡丹を以てし給を不長春  
といふ松を枝に配するは牡丹本支二軒日の花と  
宛から此の意を尋るも叶ふかふ似たり、唐めか  
しい風俗の名の字も尋らるるにせしむるも今も  
時代錯誤といふ人あるは是にばず料理を以て羊  
といふ名をつけて人之れを怪するも即ちよき  
名とする時代もんばと後にはこれを名とする  
七月二日記

七月二日 協賛校の遺業を顕彰爲す世道  
人の心温むんとする温故知新の會館成る事其  
式に招かんと行き書庫に入り初めを君年出づる

元暦の書房の版木と見え此版木の書庫の  
二層に満ち、初め帝大も此今に保友を託し後下  
郡しはとも也、此今にの理を尋る人の知人あり山田直  
矢由希久寛中村孫六上田希也中村孫六  
といふ事とて二十数年彼名もたう、此の今  
館の有志の寄附を以て運ぶ事とて其の書庫其他  
大要あり如し、偶に書庫内に版木の印摺  
を從説に供してある事あり、数枚中多し  
の内、此今と君年出づる中、歌合一頁  
元暦の書房一頁をたふすといふ



所在地 東京都豊多摩郡那志谷町下遊谷氷川裏三八ノ一

工程 大正十五年八月起工  
昭和二年三月竣工

坪数 延坪 壹百〇五坪  
内 武階四十八坪五合  
屋階五坪一合五勺

工費 總工費四万圓

倉庫及會館新築工事 三四、九八〇、三九

電灯工事 六八八、〇〇〇

衛生工事 三三四、四六

給水及排水工事 六〇八、〇〇〇

瓦葺工事 四六九、八〇〇

版木棚工事 二、五一一、〇〇〇

木棚工事 四一八、四四五

計 四〇〇、〇〇〇、〇〇〇

外觀 近代式

軒高二十八尺

塔案高三十六尺五寸

鐵筋コンクリート造

二階建外三層階付

室觀 臺階、廣間、群書類従原版倉庫第一號、事務室、宿直室、小便室

臺所、浴場、便所

武階、廣間、群書類従原版倉庫第二號、講堂

屋階、塔案

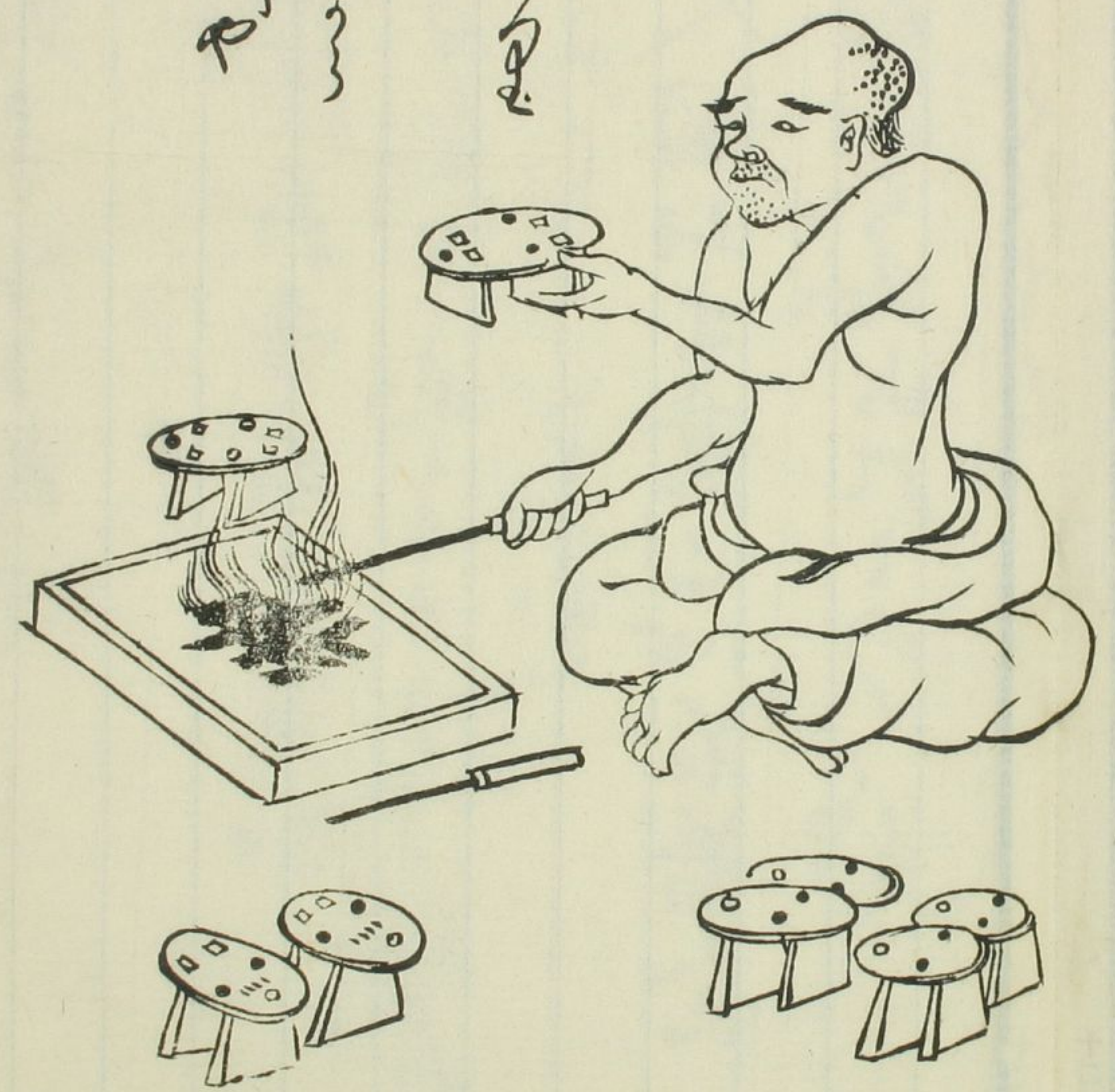
根石廻り煉瓦張り壁面防水劑入り色「モルタル」塗り

窓ハ「スチールサッシュ」エントス

内 部 壁天井共ニ白漆喰、各日本間眞鍮、天井等縁天井、疊敷キトス

昭和二年七月

合資 清水組



あつちのあつち  
あつちのあつち  
あつちのあつち

もろくけりきりしり

字本

天雲棚引山隠在吾忘本葉知

あつらひのしれりやまのしりきり三タとせ

わがしりあやこのしりきり

雖見不飽人國山本葉之心名著念

うわあ、ぬけりきりしりにとせ

しりきりしり

○此来古来の宣傳のつらしの旅後が出版せんと  
つらきとて、國の両方面に發行せんとせよ、  
いず、漸つて、つらきとて出版する本道、  
此の大段の意、木俣兵衛出版の古本、  
題名の、出来てゐる。此物の解題、  
筆、やら、つらきとて、名家の道、  
把つたよ、つらきとて、  
：就て、つらきとて、  
こ就て、つらきとて、  
こあつた、つらきとて、

一 古本の中、つらきとて、  
古本、つらきとて、

を供養するといふ本分、柱と他の墓とを  
と云ふる不がある

一 古を居る似空りのもの、骨を墓に居る  
ありう、係しえとも事、人の思想、精  
神、ときよ、ことき、形而上のことが終  
人がおる點がある。

一 古を居る古人の田舎の陳列場がある  
ある、意味に柱と古人の墓場のやう  
さういふである

一 國者故に似た路がある、又古の  
又古の墓場、又思想の陳列場であ  
る、けいとも異なる、あ、徳と在つて

買ひ方つて自家の墓と云ふことが出来  
ない、古を居る、任まると獲得が  
出来る

一 古を居る後出人、方つてその墓に居る  
る、古人の墓のある所とする、後出人の  
日に養育する、古を居る、古を居る

一 昔の墓の墓の一人、墓があるが、こ  
一、心一墓に居る、古を居る、多く  
著述を現く、人の墓に、数多くある  
の心

一 此の墓、墓所一説、や人名、墓に  
全く漏れてゐる、ものが、多くある、

版元や刻師のちよまらざるに其名も埋  
没してはるる墓があるか分つたよあ  
か、古本のゆゑにキヤント傳つてゐる  
彼等の位牌も乃るべきことよあ  
らう

多くの墓はあつたに出来ては世の昔  
轉賣に出遇つてはるる年千年と傳  
はつたの極めはさういふ日つたも  
親族の縁者外はるる礼葬も受け  
ないが昔持として残る墓は永くは  
へん多くの他人に遺持をえ且  
禮葬せらる

一 古本屋の隔りの新改屋がある、新改者  
が棄ると、まゝに古本屋の領域に入るの  
が、併し何んかといふと、古本屋の  
奥行の新改屋も、居るごとく、何ん  
といふと、**行**奥床しい得の既継式  
も千年に、流つてゐるからである

一 後書人が日巻して多少の指談をいふ  
の、古本屋がある、いふは該地の人も  
未見の回者を知り、此家にある、回者  
七回し、こと此の地底のやうな、**行**  
たやすく扱かし、事なうあ使がある、古本  
屋の主人も、**行**七多くの智談を考

此のいかに版式や圖表を執つての事故や  
その稀な心あるや否や、仍版のあること  
や同じ書物の標題が変つてゐるものこと  
ハ流石に其の言世業に於て多くハ知つて  
ゐるもの、是れに教はつることか、或るもの  
一 披索者の眼法次第で切り出しも  
出来る、所抄のむかへ本に於けるものを  
定をとりやうとして其目的を達す  
ることと出来る、是れをを下々に出せ  
自ら又又換へることと出来る  
一 此を通すの執味の購めて自家の存を  
とすものがあるけれども、又しやうも購め

のみが執味のまゝ、購めがよも自らや稀  
なを見えるだけして執味を以てえすこと  
のむかへ

- 一 亦、野暮のよりの書物に後あるべきよ  
りの中と後あるべきこと、執味があること  
への実用家心も書物の執味が及びるい  
実用を後するが覆刻をいひても、  
今、治版をむかへるい譯心ある  
執味の上、うらやみの中と後するとも  
古色の揃うべきものを見ん、いふが  
満足が出来ることである
- 一 五百年七百年、或る千百年のた

書が或回かの兵燹や天殃を免かぬと  
儼然存してあるの、頗る稀なり例ひ  
天祐といふて述べるいふかある趣味  
家がえんて興味を感ずるの、寧ろ  
豊富然びある。こんど新しき多くの  
便を拂ふの七亦亦然びあらぬハ  
らぬ

一 回書りの價は、めづかしく其の古の古の價  
の尺度びるい、唯に稀觀の故を以つ  
て思書に回おれのお傍を附するよ  
あるが併し大体或る程なまを其價  
もあつたよふである

一 書物のお傍び世の中への風潮や  
の度遷を批判し得ること、言ふま  
も。

○回書三宅雪嶺、執筆の旅行我親と讀むと  
「アイスクリーム」の一冊があつて、嘗て  
北極海録を収めてあるのを、一冊も  
経歴のその友人が大概に有してある  
れもその経歴も大陸に渡つたものか  
嶺に懐南七もそのを渡つてある。雪  
嶺の懐南七もそのを渡つてある。雪  
嶺の懐南七もそのを渡つてある。雪

四月六日夜、劍川志賀重昂氏が病氣で歿した。氏の人物及び事業は知られたやうで知られず、號の矧が音「シン」であることを知つた者が何の比例か。普通に「イン」で通つて居り、他の事も其の程度に於てするのが少いとしなからう。早晚關係者が詳かにしようが自分は舊るい手紙を取り出して見た、明治二十四年十月二十九日の日付であつて、中に畫をかき「Mr. Miyake e-caping after Mr. Teorem. Guam from Japan.」と題し、「こほり柏しける里をぬけ出で、南の海で椰實をぐあゝむ」との狂歌を添へてあつた。アイスクリームとは固より高利貸の事であつて、その少し前から高利貸をアイスクリームといひ、今も尚ほ通用し、或は略してアイスとしたりする。志賀氏の畫や、狂歌や、自分の高利貸に賣められるのをからかつたこと言ふ迄

と利便を月帳面に掛ひ 高利貸間に信用あつたが、信

後に何事も無かつたが、その娘が自轉車で乗り廻はし



アイスクリーム

もない。  
自分は生來金勘定を軽く見、その始末に注意しなかつた。計算が出来ぬでなく、數字は相應に取扱つても金錢に興味が薄く、學校に寄宿して居る時、金が無ければ無いで、教科書も持たず、下駄が無ければ跣足で歩いた。卒業して月給五十圓を貰ひ、出入を考へず、拂日に拂ふだけだ。奢りもせねば足らぬ筈なけれど、時々足らぬ事があり、足らねば次の月の事にして置く。同窓の友人で借金の連印を求めるのがあり、自分は何とも思はずに捺印し、時として其中の幾分を受け、期限が来て書替へるとして、證書を改める場合、その儘に捺印した。甲に返すが爲めに乙から借り、乙に返すが爲めに丙から借ることがあり、その都度に額が増し、それでも何とも思はなかつた。金錢に關し、鈍根よりも

どハアイスの多くの名も今も忘れぬが雪嶺の流石に  
記憶かよひ、長く記憶するを深手を買ふたの  
知れぬ、自分と今も記憶してあるを感るアイス  
の目前に證書を賣いて書か立派にと集めるとん  
どを思ひ出さ、此金馳ひ深手を買ふたよひ生  
涯の債の淵と沈んで身身の野原をころろれよひ  
あつた、笑を云く、主身の糧を供出したよひ亦  
此の悪魔であることを思ふと一種必死の模範心  
あつても云く、不思議いさげん、雪嶺がアイ  
スに私達ももろもろ以上の経歴があつたよひ思ひ  
ろろろれ

七月三日記

低能であつたらう。

最初に借りたアイスクリームは何處であつたか、多分四谷の石川といふのであつたらう。三人連帯で百圓借ることになつて居り、三月の期限で、初めに三分分の利息を引き、三月目に元金を返さねば證書を書替へ、利息が躍ると稱した。六分の利息で、三月目毎に十二圓となる。6, 6, 12, 6, 12, 6, 12, 6, 12, 6, 12, 6といふ計算で、一年間で利息が元金より二圓多く、謂はゞ十割の利に當らう。それも貸主側では書替のみで承知せず、時々返金を請求するので、他から借りて返却する事になる。高利を借るやうな者は急に返金し得ないのみか、利息を拂ひ得ないに定まつて居るも、連帯者の中に氣の利くのがあり、何處かに新貸主を見出だし自分も其れに加はつた。何ヶ所か借りた結果、利息のみも拂へず、新たに借ることも出来ず、滞れば直ぐ裁判所に持出され、其頃勸解といふ事があり、呼出しに應ぜねば罰金を取られるので、幾度も取られた。

内務省の二等屬で田中といふのが公然高利貸を営み、省中の金満家と呼ばれた。それが自分の勤務する

一ツ橋の大學へ來り、「小川の連帯の事を御承知か」と尋ね「承知」と答へたのであるが、小川に「あゝいふボンヤリした人を連帯にするのは氣の毒だから斷る」と言つたと小川が苦笑して語つた。後に田中が或る人の關係で東京専門學校講師某氏（現に早稲田大學の有力者）を伴ひ、自分の寓居に來つて怒鳴り散らした。そこで有り合はせの棒を以て之を逐ひ出した事があるが、その田中は妙な男で、自分が逐ひ出したに拘らず、「あれは私が悪かつた」と言つたと聞いた。後に田中は市會議員となつて幅を利かし、自分も時々學校かで會ひ、面白く話した。棒を以て逐ひ出した事が大隈侯に知れたと見え、侯が杖葉を付けてからかつた。

幾人もアイスクリームに關係したが、主ものは石川であつて、何かといふと人が注意して呉れた、「高利貸でも石川だけは罷めねばならぬ、あゝいふ酷い奴はなし」と。然し自分は其れ程に思はず、大抵言ふ事を聴いてくれた。正味幾らになつたか、證書面で随分多くなつても、裁判沙汰にした事がない。酷い時には酷かつたらうが、何處となく餘裕があり、幾らか自分の爲

めになるやうにしてくれた。机の上に六連發のピストルを置いてあつた所など、威しもあらうが、用心もして居つたと思はれる。憲兵大尉の何とかいふのが憲兵をして引致せしめ、一晩寒い處に拘留した。罪が無いので放免され、怒つて之を訴へ、大尉を免職にしたけれど、寒い處に拘留されたのが原因となり、病んで程なく歿した。その子が市會に出、金が有つてか、羽振りによさうで、何かで損し、縊れて果てた。自分に酷くなかつたので氣の毒に思ふ。

石川と對等の位置で番町に木下といふのがあり、石川よりも家が立派で、額だの、襖だの、書家の揮毫一面に張つてゐた。借金のカタに書かした所があらう。そこへ自分が請求通りに拂へないと言ひ込んだ。木下は笑つて曰ふ、「あなたも恠巧になつた、始めは丸で馬鹿だつたが、幾らか物が判かつて來た」と。さう言つて、裁判に持出したやうであつたか、別段の事なく濟んだ。これは元が肴屋とかで、體格が頑丈で、病氣に罹りさうもなかつたが、程なく歿した。自分は初め利息を几帳面に拂ひ、高利貸間に信用あつたが、信

用あるのは馬鹿扱ひされて居るのであつて、高利を高利の儘に拂ふのは馬鹿と知つた。下谷に宮本といふのがあり、やはり市會で力を伸ばして居り、酷になつたのがあり、名前通りに坊主で、坊主の墮落したのであつた。利息が頗る高く、一割といふので、10, 10, 20, 10, 20, 10, 20、即ち七ヶ月で利息が元金と同様になりそれで直ぐ裁判所へ持出し、何の用捨もなかつた。それ程の事をすれば幾らでも金が溜らうと尋ねれば、首を振つて答へた、「いや、溜る譯ですが、さうは往きませぬ。根が女に甘くて、それに借り倒されてしまふ。藝者にしなだられると好い氣になつて騙されます」と。墮落にも程があるやうで、墮落坊主が珍らしくないと知つた。

尙ほ外にも幾人かあつたが、中に柴田といふのがあり、會計検査院の屬官を勤め、後に公證人になつてゐたと思ふ。友人で検査院に勤めた者の關係で連帯三人が其宅に出掛けた。これは誰かと拂つたものと見え、後に何事も無かつたが、その娘が自轉車で乗り廻はし



低能であつたらう。

て居ると聞いた。東京音楽學校へでも通ふのであつたが、柴田環として知られ、今は三浦環として米國に語つて居る。事實は三浦でもなく、廢姓環が宜いかも知れぬが、何にしても環といへば日本中の名物女となつて居る。自分が偶然に關係したアイスクリームから變つた女性が飛び出したものと思議がらずに居れぬ。

高利貸は殘酷なものと定まり、シアイロワクとか、金色夜叉とか、色々例を挙げられるが、人情の忍びない所を敢てする殘酷性があるにしても、悪人とすべき者が多いと思はれぬ。悪人は高利貸で暮らさうと考へず、もつと手取り早く大儲けする事を考へよう。高利貸は生き馬の目を抜かうとせず、一定の順序で儲けうとし、寧ろ小心翼翼、後生大事に金の番をするやうなのがあり、それでも随分倒されたりする。高利借が必ずしも高利貸を倒す意なくて之を倒すことある如く、高利貸も殘酷な事をするの意なくて殘酷な事をするのもあらう。マコウレイのウオーレン・ヘスチングスに「ヘスチングスが高利貸を營み、「例の如く失敗した」と書いてあり、例の如くとあれば何處でも高利貸が失敗

し易いものと見える。善人のすべき事でなければ、悪人といふ程の者が従事する所で無からう。案外正直なのがあり、同情あるものもある。唯だ高利貸を營まうとする時、金に關して心を鬼にしようと思つた丈けの事があらう。

漢學者とか、司法官とか、軍人とかで、高利貸業者となるのが少いと思はない。「借りた者を返さぬといふ法があるか、人間の皮を被つてさういふ事が出来るか」と責め立てる所、自身で道徳家と心得て居らぬ、それで借りた者から觀れば、鬼とも蛇とも思はれる。普通に「金は貸すべき者でなく、貸さねばならぬ時に與ふべし」といふが、金貸しは少くとも其邊で普通の教訓に背く。金貸も規定通りにすれば限業者となり、社會に必要なのであつて、高利貸は規定を外づれ、人情の弱點に乗るので、咎むべき事になるが、人間は悪人といふ程でなく、悪人になり切れない者の従事する所と見立てゝ宜からう。高利貸の主人は人の窮迫を顧みず、督促して已まないで、殘酷といへば確に殘酷ながら、家族が割合に普通並であつて、往々頗る優さ

しいのがある。主人獨りで何でも取扱ひ、毎日裁判所に出で、執達吏を以て差押へて居るも、家族は差押へられる者を氣の毒がり、顔を合はすことさへ恥かしがり、何とかして職業替へするやうにと主人に頼むものもある。高利貸で代々續くのが何程あるか。二代と續くのも多いと言へなからう。

高利貸が成るべく職業とすべきで無いと共に、高利も成るべく借りてはならず、寧ろ斷じて借らぬと定むべきであつても、彼の木下が言つたやうな事がないでは無い。自分は初め無思慮で高利貸に關係したもので、それで多少の經驗を得ては居らう。高利の爲めに損した事が少いと言へず、随分永く崇られたけれど、それで利益を得て居る所があると言へば言へる。小村壽太郎侯の外交は高利借りから來たといはれて居り、まさかさういふ事もないが、高利貸に虐めつけられた者はその經驗ない者の知らぬ事がある。脅迫に驚かず、差押を恐れず、空虚な名譽を三文にも思はぬ所がある。斷じて高利貸より借ること勿れといふを定則とし、既に之を借り、それで倒れねば、負け惜みにも幾らかの

利益を得たとして慰めるに足る。自分のアイスクリームに關する經驗は、後より顧みて愚劣なる事をしたとする反面、馬賊にでも交はつて來たやうに面白く思ふ。畑川氏の書面よりアイスクリームに思ひ及び、こゝまで聯想した。




エクス・リクスが日本に傳はつたのは明治三十三年頃であつて、それから愛書家の中には各々自分の趣味に従つて或は木版印刷したり又は著名な画家に依頼したりして段々わが書界に知られて來たがそれが一つの團體となつたのは維新後三十年も過ぎた大正五年のときである。

その時の肝煎りは内田魯庵、山中共白、三村竹園、小島鳥水氏等で日本藏書同好會といふ名でエクス・リクス

續藏書票の話

してある版では到底モリスエ博士の努力に及ばないを感した大抵である。

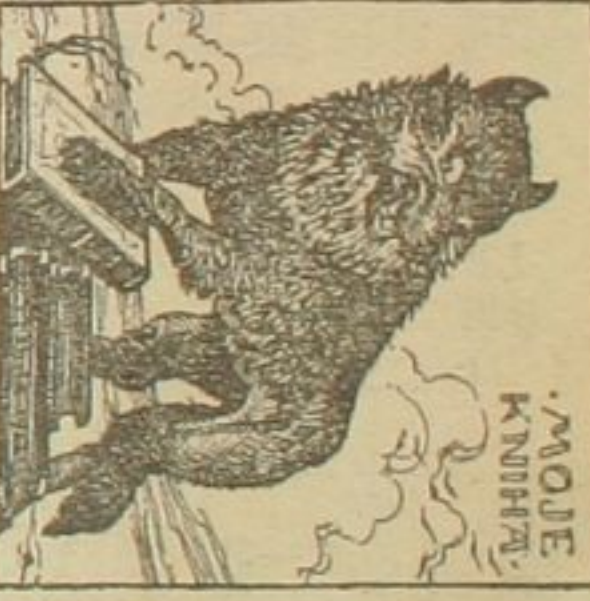

て整理し眞面目に研究的に蒐めてある人が多。

挿入の「エクス・リクス」中梅村包雄氏のもの「木版三色」を、除く外の四枚は何れも歐洲の藏書票買つて來たもので、その「版権」の點において如何にも本場らしいアツカ抜けした感がある。これら外國のものはおおむね古版か銅版であるが、日本では木版の優秀な技術とかかる目的には最もよく適してゐる和紙とを使つて本物のものよりも藝術的氣品の高いものを一つである人が多。

リクスは、思はしい成績を挙げ得なかつた。現在の日本藏書界は大正十一年、藤原三坂本篤、豊仲未深氏等によつて生れ、隆盛に越いて、現在では五百人位の會員を有するに至つた。

エクス・リクス

【梅村包雄氏作その他】

七月一日 赤坂本おるり

市島正成先生 呈上

わが書界の発展に寄与するものとして、  
 明治三十三年頃、エクス・リクスが日本に傳はつた。  
 それ以来、各々自分の趣味に従つて、或は木版印刷したり、  
 又は著名な画家に依頼したりして、段々わが書界に知られて來た。  
 それが一つの團體となつたのは、維新後三十年も過ぎた大正五年のときである。  
 その時の肝煎りは、内田魯庵、山中共白、三村竹園、小島鳥水氏等で、日本藏書同好會といふ名でエクス・リクス

疎	待	水	腹	西	至	隅	過	造	函	余	
如		朗	爲	教	還	還	海	物	人	嘗	
春	霽	然	道	十	入	寓	南	奇	一	讀	
箒	乃		又	里	寓	豐	望	怪	時	昔	
直	發		穿	昏	遇	後	衰	函	興	人	耶
齟	復		牖	思	一		山	手	到	函	馬
出	溪		取	覺	水		於	亦	鼓	疑	溪
有	沿	痛	明	左	北	寓	雲	有	舞	其	園
土	東	民	余	右	北	限	際		其	山	卷
戴		家	買	峯	未	邑	已	寫	筆	貌	記
石	愈	焉	炬	巒	益		覺	不	墨	太	
者	東	聖	以	非	發	臘	其	到	身	奇	
石			入	凡	源	月	有	者	及	峭	
挾			遇	山	羨	五	異	也	覩	恐	
土	愈	大	繡	溪	山	日	矣	歲	豐	非	
者	奇	霧	窺	相	者		既	戊	耶	天	
全	群	余	見	迫	沿		經	寅	馬	壤	
石	峯	恐	月	處	焉	入	二	遊	溪	間	
者	挾	大	在	鑿	而	豐	肥	鎮	乃	所	
全	水	好	溪	山	東	前	薩	西	知	有	
石	攢	山									

山陽之遊記  
 其地之奇  
 其山之峻  
 其水之清  
 其人之淳  
 其物之珍  
 其風之雅  
 其俗之淳  
 其志之堅  
 其行之剛  
 其言之直  
 其心之誠  
 其氣之壯  
 其神之清  
 其骨之剛  
 其血之熱  
 其肉之厚  
 其膚之滑  
 其髮之黑  
 其齒之白  
 其目之明  
 其耳之聰  
 其鼻之靈  
 其舌之甘  
 其口之香  
 其心之平  
 其性之溫  
 其情之厚  
 其義之重  
 其禮之恭  
 其信之實  
 其智之明  
 其勇之壯  
 其力之強  
 其氣之盛  
 其神之清  
 其骨之剛  
 其血之熱  
 其肉之厚  
 其膚之滑  
 其髮之黑  
 其齒之白  
 其目之明  
 其耳之聰  
 其鼻之靈  
 其舌之甘  
 其口之香  
 其心之平  
 其性之溫  
 其情之厚  
 其義之重  
 其禮之恭  
 其信之實  
 其智之明  
 其勇之壯  
 其力之強  
 其氣之盛

乃

太白	釋所	飛泉	渴者	多老	援樹	而石	蔽石	夏雲	破裂
又	一獵	師飄	王叔	木葉	攻石	陰皆	如典	狀者	成洞
行溪	新獲	命燭	明也	脫槎	者大	皆紫	石爭	而樹	穴者
又教	豪豬	之割	至柿	牙瘦	抵峯	綠相	勢而	白石	兩石
曲隨	而煮	之助	有高	古皆	勢石	間或	欲勝	之生	相鬪
峯勢	上之	脆如	峯不	倪黃	如董	石半	自樹	又生	興一
下或	激雷	連引	知共	吾欺	法而	或沒	樹中	生而	欲倒
雪			其幾	也	而苦	全身	奮躍	而上	者石
			十百	也	苔枯	又如	而出	指叢	救層
			女余	也	覺蒼			生	累成
			急						

或淳	君州	主會	槁自	亂其	或淳	君州	主會	槁自	亂其
膏凝	便子	會公	此行	影也	膏凝	便子	會公	此行	影也
碧峯	之	余故	溪北	至屈	碧峯	之	余故	溪北	至屈
影為	奇	竒	閑者	林溪	影為	奇	竒	閑者	林溪
之	會公	居二	數十	稍開	之	會公	居二	數十	稍開
或碎	日共	間至	里詣	有全	或碎	日共	間至	里詣	有全
似水	會公	仙巖	古城	小村	似水	會公	仙巖	古城	小村
而	余先	巖巖	正行	過一	而	余先	巖巖	正行	過一
	詔曰	石突	寺			詔曰	石突	寺	

不世賞宿寺前迎旅  
 掘山鑿山作洞壑  
 立山頂會公  
 君州山水大  
 主會公余故人  
 槁自此行溪北閑者益閑數十里詣古城正行寺  
 亂其影也至屈智林溪稍開  
 或淳膏凝碧峯影為之  
 或碎或全似水而

也	百	跡	山	其	寺			吾	中	成	驕
里	如	幾	賦	屬	又			酒	又	敬	西
妙	妙	半	水	豐	三			盡	如	峯	還
義	義	海	理	前	日			預	亦	如	山
者	者	外		者	肆			戒	五	群	峯
不	不	弱		皆	去			家	菩	仙	得
知	知	冠		有	踰			僮	薩	駢	兩
幾	幾	東		別	海	宿		馱	奏	肩	皆
十	十	遊	蓋	態	東	阿		搏	樂	露	變
拳	拳	得	皆	自	歸	保		於	而	其	幻
謂	謂	妙	自	麥	自	村		馬	至	半	作
之	之	義	麥	山	海			末	也	身	態
海	海	山	山	其	雲			取	還	萬	或
以	以	發	發	尤	中			醉	到	松	前
為	為	故	故	大	顧				屈	振	以
無	無	獨	獨	者	望				智	驚	為
雙	雙	絕	絕	者	鎮	聖			林	鼓	一
今	今	耳	耳	耶	西	歸			台	濤	山
馬	馬	余	余	馬	山				公	於	者
溪	溪	足	足	岳	岳				憲	雲	分

也	末	曲	口	奮	遊	看	夷	且	賞	水
遂	此	孤	一	袂	不			馬	仙	不
席	耶	店	曲	與	可			溪	巖	生
溪	余	店	奇	偕	期	况		溪	至	動
畔	日	主	於		將	公		山	於	石
共	欲	識	一	忽	復	等	真	相	羅	不
舍	看	余	曲	覺	溯	生	可	迫	漢	得
公	山	面	比	迴	之	長	遊	無	則	樹
傾	身	驚	諸	別	以	此	也	田	人	不
飄	曰	曰	前	自	諦	其	然	人	工	蒼
一	山	是	遊	淺	觀	土		工	耳	潤
醉	有	前	更	入	之	宜		耳	耳	潤
宿	何	喫	可	深	公	不	為	礙	然	所
山	好	猪	喜	自	其	魁	二	人	皆	以
寺	看	客	也	平	奇	其	豐	目	馬	余
明	吾	也	復	入	也	奇	通	而	溪	賞
兩	不	有	至	奇	余	也	道	其	之	馬
借	禁	何	絕	沂	則	余	過	者	支	溪
	子	幹	壁	前	再	則	者	踏	裔	而
	看	再	下	教	公	再	慣	坦	矣	不

ノ	ハ	フ	集	尚	ナ	想		立	旧
一	ア	ニ	二	本	ラ	フ	有	文	ノ
首	ラ	編	ハ	文	ニ	=	酒	改	追
ア	ザ	者	一	中	カ	大	無	已	記
ソ	ル	カ	得	一		合	事	卯	ア
テ	カ	耶	八	所		氏	樓	十	リ
九	否	馬	絶	得		=		二	
首	カ	溪	句	詩		贈		月	
ト	旧	、	、	九		リ		五	
十	園	因	ト	首		夕		日	
リ	卷	ノ	テ	新		ニ		山	
居	写	ナ	一	旧		園		陽	
リ	一	キ	首	ト		卷		外	
	ナ	ヨ	ヲ	送		ニ		史	
	ラ	リ	遺	ト		記		併	
	シ	削	ニ	ト		入		録	
	一	除	ア	ア		セ		于	
	ニ	セ	ル	ル		シ		鴨	
	ハ	シ	ハ	セ		セ		河	
	左	ニ	想	詩		/		之	

附記

帆	神	踐	寫	始	不	能	余	横	数
外	或	前	一	圖	負	者	詩	長	紙
豊	来	約	本	為	秋	如	文	一	戲
山	助	而	諾	合	山	董	采	卷	以
依	我	不	而	公	水	巨	拙	又	意
々	遂	在	未	取	然	倪	不	記	不
如	能	舊	果	去	目	黄	足	其	相
相	成	圖	今	備	以	之	状	其	接
送	此	尋	茲	後	山	流	其	由	属
者	屈	諸	已	故	水	者	髣	係	之
今	指	胸	又	友	為	者	髣	録	
猶	已	臆	護	橋	海	躡	其		
在	十	冥	毋	元	内	其	境		
目	二	想	至	吉	第	一	而	所	
中	年	默	尾	亦	乃	乃	補	得	
也	矣	運	路	好	自	自	成	詩	
	憶	覺	雷	山	賴	成	之	九	
	當	山	旬	水	子	之	後	首	
	時	情	日	請	成	幾	有		
	帰	水	乃	為	成				

	一	一		一	一	注	旧						
マ	旧	柿	リ	耀	杜	意	記					尤	酒
マ	記	坂	シ	ヨ	實	コ	西					難	野
シ	檜	店	ガ	リ	村	ヨ	ト					獲	半
シ	山	前	縣	月	ハ	リ	ア	地				許改	瓢
ト	寺	ノ	道	ノ	現	テ	ル	名				飲望	紅
云	ハ	飛	改	鬼	今	訂	テ	及				同	滴
ヘ	下	泉	築	タ	ノ	正	東	方				遊	瀝
ル	郷	ハ	ノ	ル	三	セ	ニ	位				○	山
ヨ	村	何	際	所	郷	シ	改					韻快	經
リ	樋	レ	崩	ハ	村	ナ	メ					僧	千
梅	山	ナ	壞	下	守	ラ	タ					ノ	嶂
山	路	リ	シ	郷	實	ン	ル				ノ	○	碧
寺	淨	シ	テ	村	ナ		ハ				際	ノ	峻
ト	真	ヤ	今	一	リ		善				過	字	増
セ	寺	不	ナ	ツ			シ				テ	ハ	又
シ	ナ	能	シ	堂			何				脱	小	欣
ナ	リ	知		ノ			人				也	生	菴
ラ	ハ			所			カ				リ	書	一
シ	ヒ			ナ			ノ					写	率

○皮上運條と海流の折、猫いさぎ即ち精製(製)の事なるべきに譲る。先次此劑を販し、自殺を企てざるものを治癒し、救命を得たり。服して時乃ちを往て、凡ハ胃も洗滌せん。救ふことを得と。此劑の原料中、二燐あり、一ニ毒素と云ふ。西洋ニハ二本のマツキを以つて自殺が出来るといふ。あるが、日本のマツキは精合が少く、いさぎ四五本を要する。ちんといふ。我輩中、此ニ茶福色の煉つたものに、煉羽麻布の如く、千工一ブ、又這入つてゐる。患者の排泄物を時中、二檢せん。心臓の微光を認め得え、煉也。患者愈えたる後、身体全部に、己さう、薄皮の剥ける。凡ハ此の毒劑

を服し、特微也と云ふ。 七月四日記

○此頃、安室の血、無キ新しきを製し、赤腫るハ、世傳を出一し、後後七、ちんといふ。治動衆士、新薬の滑純名を弄せし、あるが、二風さす、く、あると、毒味、氣、ちんといふ。凡ハ此の毒劑を、此頃、安室の血、此の三十年記念の、日、約、二、大、十、日、部、と、い、ふ、が、ラ、じ、大、放、送、を、擬、し、て、マ、イ、リ、ロ、オ、一、日、勤、一、日、衛、反、び、い、ろ、く、の、放、送、を、行、し、中、外、諸、國、の、衛、生、法、と、方、言、洋、山、の、あ、や、つ、た、の、ハ、可、き、う、可、笑、味、か、あ、つ、た、廿、十、字、漸、頭、と、云、つ、て、(回)交、而、敷、心、地、の、お、と、あ、の、日、誌、に、擬、し、手、を、添、へ、る、け、り、



田をうらうしりうするを擬倣方がある誰の也  
出来ることとてころころこれを一處とて七人前にてつ  
まひらんたあの練習を託せうと見えり此中大  
けといふは活動弁士也

○昨の家家こねかて祐の林町の宅に利ふ山集  
宗家とて訪の目こと稀んが、北院と訪の初め也  
大震災の根岸の宅に悔け木兼の別荘七損  
宅を多分け、林町書の別荘の或る部  
分を移して建てた也とか、北林町の宅地、四千坪  
あり、地内、宗家主人の妹婿伊藤三郎の居あり  
又同じ地内、山院の生のたえり、建てた音  
の舎あり、まんと市崎と名づけ、今の川壑

技師とありて入海建部二侍士と共に余も扱われ  
たり也北院の學督者、法橋轍二といふ日人  
び院、高木ゆめ範の教授、今も北院にあり、會  
整、ある由を多分け、僅、主、五六家の親族の  
このころも法橋、この生に惜しき不ひ也、目の奴  
容、ある、この四人、吾等の目前に立つる各、本  
思を陳ぶ、皆、やうなを、幸、後、生、さう、吾等  
七郎、まんと代、法院と説き、余、先代の宗家主人  
が初切、湖宮の妻、法院、後、今、今、其、紀念  
の、生、美、の、目、成、を、勅、め、又、古、田、五、伍、二、地、名、神、出、を  
編、る、あ、も、し、あ、る、こ、と、も、七、勅、め、神、出、を、多、う、け、た、る、  
生、の、此、の、編、る、宗、事、業、に、た、か、し、守、字、を、司、の、り、

市、此等の生か一更に自炊母生活をやしむること  
多の養育成さん等母生の由ま、江部遠久賀の真流  
杉木弘ら成切しなるよ、あることらむを悔ひ、此の  
塾の公の淵源あること、下を悔ひ、信ら宮の御余生  
活寮舎生活か、生るを悔め必要なること、監督  
者望しきと得せる者の多く、瘠顔の風紀を  
助長し、為学の多を生をしんるを、其ふま  
困難と感せしありす、其及び宗家の此等  
の者、其義あること、其七月廿日記  
○其市やりをとらうあること、其下谷五つ町の  
文行堂に、其寄り北原前田辰吉村家をも出  
る回者を、其逆らうるも、其皆有觸んたること、其ふま

種あり、其のよめること、其は、其京都をも、其ふま  
り、其あやんたる一書のみを、其描りしめ、其ふま

ふふ大里柱

六冊

といふ、其繪入美大流紙形を、其西勢も、其の  
永代流を、其ふ、其の心也、其序、其如京教人  
月、其守物ととも、其お心名の名を、其巻、其尾、其出版  
心京寺的、其西、其条、其下、其川、其菊、其尾、其兵衛、其板と、其ある  
よ、其刊年、其なり、其此、其古、其居、其る、其是、其り、其の、其三十、其行、其む、其ら  
の、其昔、其日、其とも、其勤、其を、其せん、其は、其その、其内、其の、其何、其ん、其か、其刊、其年  
を、其赤、其し、其得、其心、其此、其古、其の、其刊、其年、其七、其判、其し、其得、其べき、其欺、其大  
体、其眞、其重、其なり、其嘉、其祥、其後、其の、其い、其の、其と、其見、其て、其大、其里、其柱、其ら、其ら  
人、其後、其る、其よ、其紙、其汚、其損、其ら、其ら、其自、其を、其こ、其内、其容、其と

高き其の強引高き其の道徳が政令中に基づくこと  
を教くはさういふ人も西鶴の事や成り型に倣らば  
人心を迷わすものあり、其儲と成りしもの世  
に於て人の能くする所は其流の昔の多く出た  
七佛の如くあり、形こそ是るなり、今の山本業  
は日本をわたり、旋徳心、實の同業のものありし  
而も味の深き割合に人受けのたゞの成り  
看取し、人をそとからさすべし  
七月書記  
新に取者の價のたゞのこと、其後、附記を  
要す、此者實に七十圓を、若し好色を  
するせば、更にさういふ價をせん

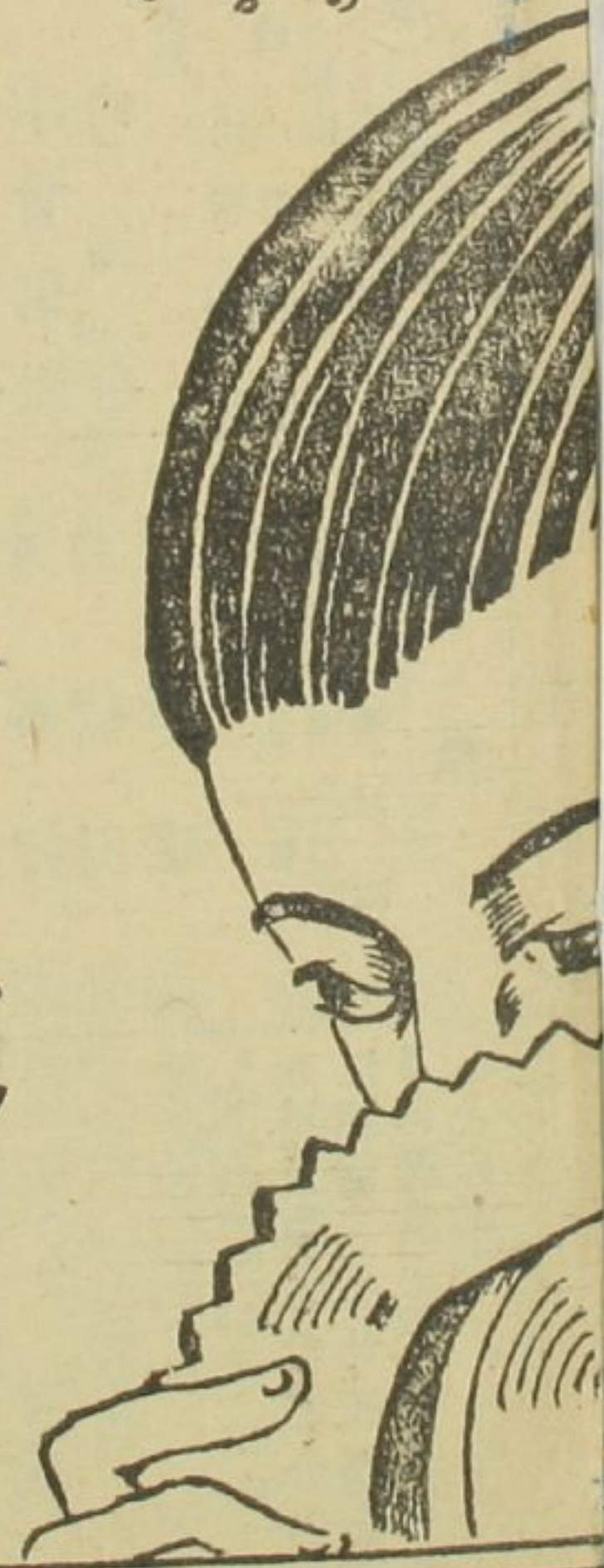
○高き其の強引高き其の道徳が政令中に基づくこと  
を教くはさういふ人も西鶴の事や成り型に倣らば  
人心を迷わすものあり、其儲と成りしもの世  
に於て人の能くする所は其流の昔の多く出た  
七佛の如くあり、形こそ是るなり、今の山本業  
は日本をわたり、旋徳心、實の同業のものありし  
而も味の深き割合に人受けのたゞの成り  
看取し、人をそとからさすべし  
七月書記  
新に取者の價のたゞのこと、其後、附記を  
要す、此者實に七十圓を、若し好色を  
するせば、更にさういふ價をせん

送文にのこりを得て居る、昔しの人には海道は狩味  
 味と云ふかんとあつたらうし、早稲の上り地  
 の溪みと云ふ校めを小範圍にする、知るところ  
 ころと云ふところ、別府の溪みと云ふところ、ま  
 ーくつと云ふところ、昔は、昔は、唯れ因  
 於の：執耳の凡景を佳としたの地が、ま  
 を打破したの地が、の選びある、勿論探検  
 家の方面に、舊習に拘る、新なるもの景を  
 私達しれ向ふところ、か、まをソーソライ  
 する、か、新なるものを、か、家を令して討究せ  
 しめ、結果、探検の、か、但し八景行各

# メヌマホマード

髪を美しくする

気分も爽やかな  
 お愛の感じ  
 メヌマホマードの  
 愛用者のみがる  
 喜び



全開小売店にあり  
 本館 井田栄堂  
 東京本館生町  
 電話 一七二〇  
 一七二一  
 一七二二

(可認物便郵種三第)

(可認物便郵種三第)

昭和二十一年

舊式扇風機  
 川北及英  
 國ヒール  
 特價大提供

和古着 貴金 上値買入  
 洋冬編特男 他 時計ダイヤ特入  
 大里商店  
 浪花 二三三四〇へ多参上  
 電話 二三三四〇へ多参上  
 浪花 二三三四〇へ多参上

輕井澤貸別荘 齊掛驛  
 丁風呂付小別荘三戸 遊樂期より四  
 貸詳細下名に電話日本橋二八七四  
 日本橋區數寄屋町一 横地  
 管塚貸地 百坪より停留場  
 十三錢都利五圓以内丸ビル

カネ 生命保險證高價即金買入  
 も取扱料立替失効保額相談電話  
 照會日本橋濱町二の三十四新大橋路  
 電話浪花一七六〇の三三三保誠部  
 小切手 銀行商引但直談  
 東京市外西巢鴨町實來社

受驗用車ビツクプロトス  
 其他各種實習先づ來校  
 認日本自動車  
 東京市田町前 學則案内書  
 理髮教授 夜素  
 六ヶ月卒業 本郷お茶水  
 文化理髮

5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6

# 日本八景決定

## 併せて廿五勝、百景を推薦

日本八景並に百景選定の第二回審査委員会は既報の如く七月三日午前十時より丸の内東京會館に於て開催、日本の學界、藝術家の權威者を網羅せる東西の委員は定刻前集集し開會と共に各委員の専門的見地より談論風發、實に十三時間に亘る大討論の後、遂に午後十一時十分、昭和初頭に於ける最も有意義の舉として大方の期待と興味とをもつて迎へられた日本八景、廿五勝並に百景の選定を見るに至つたのである

### 八景が決定するまで

#### 審査委員会の経過

最初午前十時より閉會において、八景選定の第一回審査委員会は既報の如く七月三日午前十時より丸の内東京會館に於て開催、日本の學界、藝術家の權威者を網羅せる東西の委員は定刻前集集し開會と共に各委員の専門的見地より談論風發、實に十三時間に亘る大討論の後、遂に午後十一時十分、昭和初頭に於ける最も有意義の舉として大方の期待と興味とをもつて迎へられた日本八景、廿五勝並に百景の選定を見るに至つたのである

# 日本廿五勝

- 海岸 室戸岬(高知)
- 湖沼 十和田湖(青森)
- 温泉 別府温泉(大分)
- 平原 大和盆地(奈良)
- 山岳 富士山(山梨)
- 峡谷 上高地溪谷(長野)
- 瀑布 華嚴瀧(栃木)
- 河川 利根川(千葉)
- 海岸 室戸岬(高知)
- 湖沼 十和田湖(青森)
- 温泉 別府温泉(大分)
- 平原 大和盆地(奈良)
- 山岳 富士山(山梨)
- 峡谷 上高地溪谷(長野)
- 瀑布 華嚴瀧(栃木)
- 河川 利根川(千葉)

- 海岸 室戸岬(高知)
- 湖沼 十和田湖(青森)
- 温泉 別府温泉(大分)
- 平原 大和盆地(奈良)
- 山岳 富士山(山梨)
- 峡谷 上高地溪谷(長野)
- 瀑布 華嚴瀧(栃木)
- 河川 利根川(千葉)
- 海岸 室戸岬(高知)
- 湖沼 十和田湖(青森)
- 温泉 別府温泉(大分)
- 平原 大和盆地(奈良)
- 山岳 富士山(山梨)
- 峡谷 上高地溪谷(長野)
- 瀑布 華嚴瀧(栃木)
- 河川 利根川(千葉)

- 室戸岬(高知)
- 華嚴瀧(栃木)
- 平原(奈良)
- 大和盆地(奈良)
- 山岳(山梨)
- 上高地溪谷(長野)
- 別府温泉(大分)
- 華嚴瀧(栃木)
- 平原(奈良)
- 大和盆地(奈良)
- 山岳(山梨)
- 上高地溪谷(長野)
- 別府温泉(大分)
- 華嚴瀧(栃木)
- 平原(奈良)
- 大和盆地(奈良)

# 日本百景

## 海岸

## 山岳

## 瀑布

- 鏡ヶ浦(千葉)
- 唐津浦(佐賀)
- 赤穂崎(兵庫)
- 沼津灣(静岡)
- 室積灣(山梨)
- 御濱ヶ城(三重)
- 蒲郡海岸(愛知)
- 青海島(山梨)
- 鳥羽灣(三重)
- 信貴山(奈良)
- 英彦山(山梨)
- 高尾山(山梨)
- 赤ヶ城山(山梨)
- 大臺ヶ原山(山梨)
- 雪彦山(山梨)
- 靈光寺山(山梨)
- 千光寺山(山梨)
- 霧島山(鹿児島)
- 神都高千穂峽(宮崎)
- 耶馬溪(大分)
- 面河溪(愛媛)
- 狛鼻溪(香川)
- 寒霞溪(香川)
- 層雲峽(北海道)
- 大歩危小歩危(香川)
- 赤目四十八瀧(三重)
- 神庭瀧(山梨)

# 日本百景

## 海岸

鏡ヶ浦(千葉)  
唐津浦(佐賀)  
赤穂御崎(兵庫)  
沼津灣(静岡)  
室積灣(山口)  
御濱鬼ヶ城(三重)  
蒲郡海岸(愛知)  
青羽島(山口)  
鳥羽灣(三重)  
忠海海岸(徳島)  
鳴富海岸(鳥取)  
浦田海岸(鳥取)  
高田原(岩手)  
石巻海岸(宮城)  
九十九島(長崎)  
氣仙沼灣(宮城)  
松川浦(島根)  
男鹿半島(秋田)  
新舞子(福島)  
九十九灣(石川)  
下津井海岸(山梨)  
江の島(神奈川)  
錦江灣(鹿児島)  
笹川流(新潟)

## 山岳

清澄山(千葉)  
信貴山(奈良)  
英彦山(福岡)  
高尾山(東京)  
赤城山(群馬)  
大臺ヶ原山(奈良)  
雪彦山(兵衛)  
靈山(福島)  
千光寺山(廣島)  
霧島山(鹿児島)  
淡路先山(兵庫)  
石槌山(愛媛)  
筑波山(茨城)  
朝熊山(三重)  
妙義山(群馬)  
駒ヶ嶽山(長野)  
大鳥海山(鳥取)

## 河川

長門川(山口)  
帝釈川(富山)  
三門川(富山)  
惠那川(岐阜)  
祖谷川(徳島)  
裾花川(徳島)  
奥多摩川(東京)

## 溪谷

長門川(山口)  
帝釈川(富山)  
三門川(富山)  
惠那川(岐阜)  
祖谷川(徳島)  
裾花川(徳島)  
奥多摩川(東京)

## 瀑布

神都高千穂峽(宮城)  
耶馬溪(大分)  
面河溪(愛媛)  
寒霞溪(香川)  
層雲峽(北海道)  
大歩危小歩危(徳島)

## 温泉

赤目四十八瀧(三重)  
神庭瀧(岡山)  
箕面瀧(大阪)  
魚住瀧(大分)  
富士白糸瀧(静岡)  
王餘魚の瀧(徳島)  
木曾田立瀧(長野)

## 平原

姥捨原(長野)  
八ヶ岳原(山梨)  
久住高原(大分)  
日本平原(静岡)  
富士駿州裾野(静岡)  
飯田高原(大分)  
兔野原(兵庫)  
秋吉台山(山梨)

## 海岸

室戸岬(高知)  
十和田湖(青森)  
温山岳(長崎)  
木曾川(愛知)

## 山岳

上高地溪谷(長野)  
華嚴瀧(栃木)  
別府温泉(大分)  
狩勝峠(北海道)

## 溪谷

那智老瀧(和歌山)  
養田瀧(岐阜)  
袋田瀧(茨城)  
熱海温泉(静岡)  
箱根温泉(栃木)  
鹽原温泉(神奈川)  
平原(奈良)  
大和盆地(大分)

## 瀑布

天龍峽(長野)  
養田瀧(岐阜)  
袋田瀧(茨城)  
那智老瀧(和歌山)  
養田瀧(岐阜)  
袋田瀧(茨城)  
熱海温泉(静岡)  
箱根温泉(栃木)  
鹽原温泉(神奈川)  
平原(奈良)  
大和盆地(大分)



# 代表的景勝として 選ばれたる日本八景

## 各審査委員が推薦の言葉

### 和田十 五つの理由

特有の湧泉現象  
田中阿歌磨子談

### 狩勝 眺望天下無比

雄大な原始的平原  
林島正 田村剛氏談

### 高上地谷 世界的美觀

アルプス的美觀  
小島鳥水氏談

### 華嚴 完成された繪

大地を展はす豪壯  
小杉未醒氏談

### 木曾 景勝六十里

變化に富むその流域  
山元春翠氏談

### 室戸岬 岬角の壯觀

群をなす熱帯植物  
國府犀東氏談

### 別府温泉 民衆的温泉

世界に誇るべきもの  
小川琢治氏談

### 温泉水 冬に咲く花

名物霧水の奇觀  
高濱虚子氏談

### 新日本の景勝を整理して 畫時代的の大事業成る

涙ぐましい論戰

### 審査委員會における

### 審査を終りて

聴くべき諸家の言葉

### 自然と人生の 融和に資せよ

鈴木内務大臣談

### 寫真と資料に就て

審査委員の推薦の言葉

和田十の推薦の言葉

狩勝の推薦の言葉

高上地谷の推薦の言葉

華嚴の推薦の言葉

木曾の推薦の言葉

室戸岬の推薦の言葉

別府温泉の推薦の言葉

温泉水の推薦の言葉

新日本の景勝を整理して

審査委員會における

審査を終りて

自然と人生の融和に資せよ

寫真と資料に就て

和田十の推薦の言葉

狩勝の推薦の言葉

高上地谷の推薦の言葉

華嚴の推薦の言葉

木曾の推薦の言葉

室戸岬の推薦の言葉

別府温泉の推薦の言葉

温泉水の推薦の言葉

新日本の景勝を整理して

審査委員會における

審査を終りて

自然と人生の融和に資せよ

寫真と資料に就て

和田十の推薦の言葉

狩勝の推薦の言葉

高上地谷の推薦の言葉

華嚴の推薦の言葉

木曾の推薦の言葉

室戸岬の推薦の言葉

別府温泉の推薦の言葉

温泉水の推薦の言葉

新日本の景勝を整理して

審査委員會における

審査を終りて

自然と人生の融和に資せよ

寫真と資料に就て

和田十の推薦の言葉

狩勝の推薦の言葉

高上地谷の推薦の言葉

華嚴の推薦の言葉

木曾の推薦の言葉

室戸岬の推薦の言葉

別府温泉の推薦の言葉

温泉水の推薦の言葉

新日本の景勝を整理して

審査委員會における

審査を終りて

自然と人生の融和に資せよ

寫真と資料に就て

寫真と資料に就て



一冊を撰ぶことが多く、風土記と除あすること  
 又るものも、更なる廿五日家を撰んで、惜しきり本  
 家を撰べたのち、市ノ思ひのきをある、この範圍  
 するハ、八景と承けたよが、重初て入選し、以てを  
 するよとのあるハ、何れもあらう。更なる範圍を  
 四倍擴張し、竹のて、百里をとりたりを免るも、投票  
 を本位とし、これより、この投票者、務し、此の  
 やすめであらう。兎角投票の結果、必し、  
 し、優れ、味をあることハ、此の選、  
 於て、今、得た、あらう。七月六日記  
 の此日、神田の村、書店に於て、一書を購ふ、  
 前田、奏、音、家、賣、却、本、の内也

大井庄檢注各寄

一冊

標題

大井庄檢注各寄 永仁三

佛神 下司 公文

田所 庄友 間人

巻首

大井御庄

注進 永仁三年馬上定檢名寄事

合 祈詞 間人 佛神

とあり、墨付八十枚の古文あり

永仁三年の伏見天皇の御宇より前二弘安  
正応の年號あり、後に正安、乾元、徳治  
ホの年號あり、日蓮の寐しる、永仁三  
年を距つ十三年前、時宗の山号寺を建  
たす、十三年前、北條貞時の執権、十年  
前とす、永仁四年に北條貞時卒す、  
此文書の古きを以て徵すべし、其書の検地  
帳、継之、あり、鎌倉時代のもの極め  
稀觀に属す、此の可なり、  
内容に就ては改めし記す所あり、  
此書の價五十圓也

昭和二年七月六日記

の前田屋舟家より書印に附し、石要本の内注  
本と見らるべき、五山故土燈台元を其  
の書入、洋巻和あり、此也、澤庵一途之人を抄ら  
し、来歴と考入、吾も考ふべし、余一習せざる、千  
田屋の傳も他、嫁し畢る、  
○本年既と半半と、顧みん、年家、是、  
多事、隨つて、費院、從、例あり、日三月、改家  
宅の改築も、如、其結果、後、爲と、矢、ヤ、  
あ、宅、家族の、半半を、置、キ、干、軒、  
住宅二軒とす、善治中、を、親、人の、出入、  
一、半の、家族、を、保、常、移、し、ん、ん、の、考、  
録、宅の、あり、用、を、即、す、能、は、ず、家、の、志、が、

病を醫治する者も、山崎の如く、六次、塚、  
女、一、く、者、も、運、子、の、傍、に、熱、者、の、類、也、  
家、人、も、見、あ、り、し、め、る、煩、と、春、七、六、の、外、に、  
嫁、し、て、世、に、仕、立、の、日、来、つ、て、主、婦、を、つ、と、め、下、  
婢、を、有、く、と、得、た、ん、と、仕、立、の、費用、ハ、金、三、  
千、の、あり、と、い、ひ、た、り、か、ら、夏、期、病、に、保、養、の、  
為、の、運、子、に、家、を、借、り、の、丸、家、あ、り、こ、こ、二、家、を、  
三、不、有、ま、さ、ま、あ、り、家、心、の、費用、は、彼、是、を、兼、五、  
千、円、仕、拂、ひ、た、ん、と、未、比、全、部、の、仕、拂、を、し、り、  
七、千、圓、の、出、版、部、と、し、金、融、を、得、た、ん、と、五、千、  
円、の、手、元、と、仕、拂、ひ、し、り、  
或、ん、と、残、す、所、を、く、也、  
但、未、比、

昔、也、の、他、情、を、さ、る、が、ま、だ、し、も、さ、る、お、は、ま、さ、  
拂、つ、た、五、千、圓、の、仕、立、の、日、来、つ、て、主、婦、を、つ、と、め、下、  
婢、を、有、く、と、得、た、ん、と、仕、立、の、費用、ハ、金、三、  
千、の、あり、と、い、ひ、た、り、か、ら、夏、期、病、に、保、養、の、  
為、の、運、子、に、家、を、借、り、の、丸、家、あ、り、こ、こ、二、家、を、  
三、不、有、ま、さ、ま、あ、り、家、心、の、費用、は、彼、是、を、兼、五、  
千、円、仕、拂、ひ、た、ん、と、未、比、全、部、の、仕、拂、を、し、り、  
七、千、圓、の、出、版、部、と、し、金、融、を、得、た、ん、と、五、千、  
円、の、手、元、と、仕、拂、ひ、し、り、  
或、ん、と、残、す、所、を、く、也、  
但、未、比、

七月七日記





○此今の難問題ハ河海運船と十五の河川の敷心現  
レある今此船の破産し与と政府に托着する  
ト云ハ多クもある川海運船ハ関係がある  
十五ハ是にかんじぬ。此河川問題ハ云いお  
のつかも政治問題也。其々金本川海と十五が  
斯る悲境ニ至るハ河川の運送ハ此を  
改めし也。前年大改の浪着船を十五に  
係し与時、後ハ改ニ十五の前金を夏夏運  
費、救ハ難い船を運送の係を引く所か  
ら強ハ係し与。河川海運船を首魁として  
派ハ居る事多ク、其々の文籍ハ十五  
多金も引出し与。十五の清ん比所以ハ川

海運の行流つれ所次也。其々田中内閣ハ之れを整  
理見として大蔵省に托着せしめ、此の預金  
部も出し、出資せし与るといふことハあり、此ハ  
閣内ハ異論を生じて、内閣ハ不統一を露  
露する事あり、政府ハいふくと案にして見れ、  
ハ、難関ののりも、重荷も、あるのハ、二進ハ  
三進ハ行かざる折から、債権者も、大倉組が  
差押と出かけた。政府ハ、此を口実とし、整  
理ハ年を引く事あり、此ハ、政府の無力を公  
示し、其の在河界に紛更を生じ、不安を一  
層重シキ事あり、其の事ハ、初めハ、  
政府が超然として、閣内とせん、此難がある



ジュリアス シーザは、公共図書館を建設しやうと企てたが、完成に至らなかつた。それは紀元前三九年イリイアン戦役のためである。古ローマの図書館は先づオーガスタス以前には立派なものは無かつたといひ得やう。今日に判つてゐる古ローマの図書館の二大建築はブランタンの岡にあつたアポロ図書館と、タイバ河畔にあつたオクダビア図書館とである。これは詳細に研究されてその設計圖といふものも明かにされてあるが、先づ一通り今日の図書館らしい形式をそなへてゐる。このアポロの図書館の方はやはり寺院の一部であつた事を記憶せねばならぬ。

このほかにも文庫は澤山あつたが、さき一寸問題としたこの頃の書籍といふものは、一體どんなものであつたらうか。まづこゝにポンペイの壁画の一部に発見せられた圖を掲げる。第二圖これは一見讀書の圖である事は明瞭で、左から右へ開く巻物の内容は、カラムスに書かれてある。なほ巻



(第二圖ポンペイノ壁画ニ現ルタル讀書人)

末にはいはゆる軸があつて、このほかの實物から示された所では、その軸が立派に彩色され、或は金泥で裝飾されてをる事は、恰もわが國の古寫經に見ると同様で、かの天平寫經に密陀で塗つた軸のある事に誰もか思ひ合はせることができるであらう。

また、この巻物は多く裝飾された表紙で包まれてゐる。これはギリシヤ時代にはヂャケットと呼ばれたもので、パーチメントを用ひ、その上を奇麗な糸や革ひもでしばつた。巻物の紙(パピラス パーチメントなど)にも色があるのがあつて、それが古い時代は黄色であるのは、これまた支那や日本の麻紙、穀紙のそれに頗る似た點があるのではないか。

聖典が莊嚴化されるといふ事は、西の國にも東の國にも同様にあらはれた形式であるが、さてその巻物はどういふ様式で貯藏保存がされたか。

これにも物語りがある。今残つてゐる所では、巻物が凡そ六本位堅に入る革の箱(第三圖)がある。チヨット今日のハットケースに似たもので、これについてはまた日本の經筒が思ひ出される。但しその目的は違つたもので、西洋の方のものは、多分書物(巻物)を運搬する際の便利のために作られたものであらう。

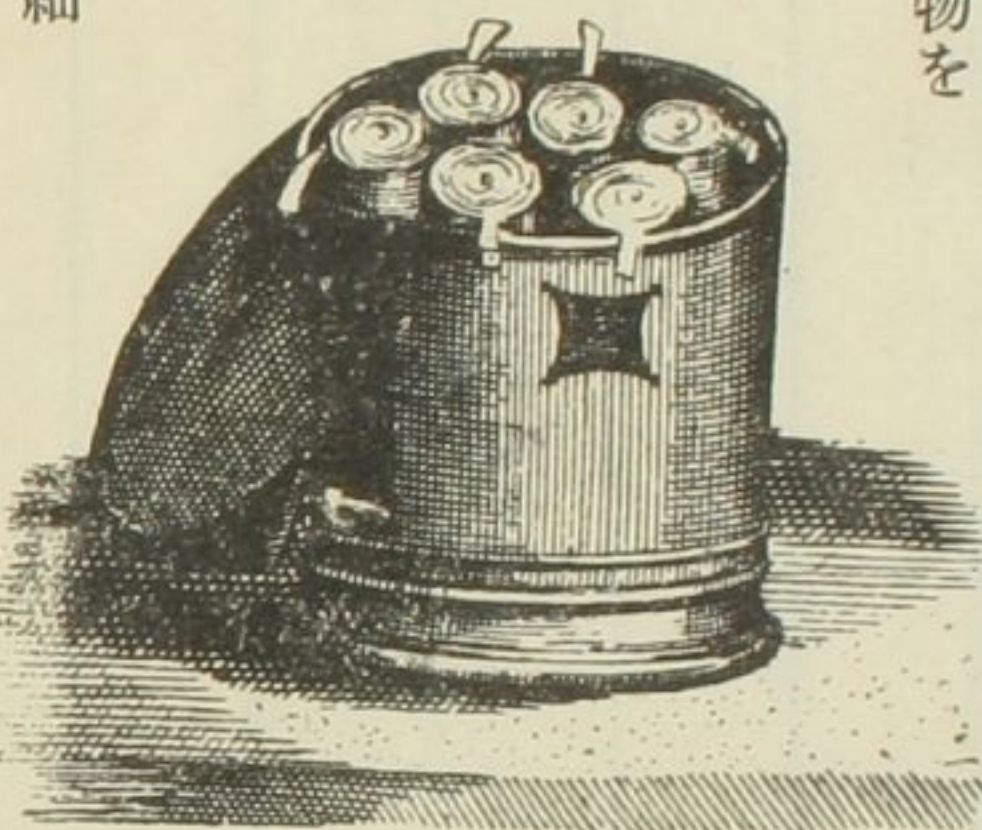
この箱に入れない多量の巻物はどうかといふと、いはゆる普通の圖書館では、書棚——といふてもそれはビジオン・ホール様のもの——に巻物の一端にその内容、即ち書名した小札が付けられて多數陳列されてゐたのである。(第四圖参照)その現物は残されてゐないが、



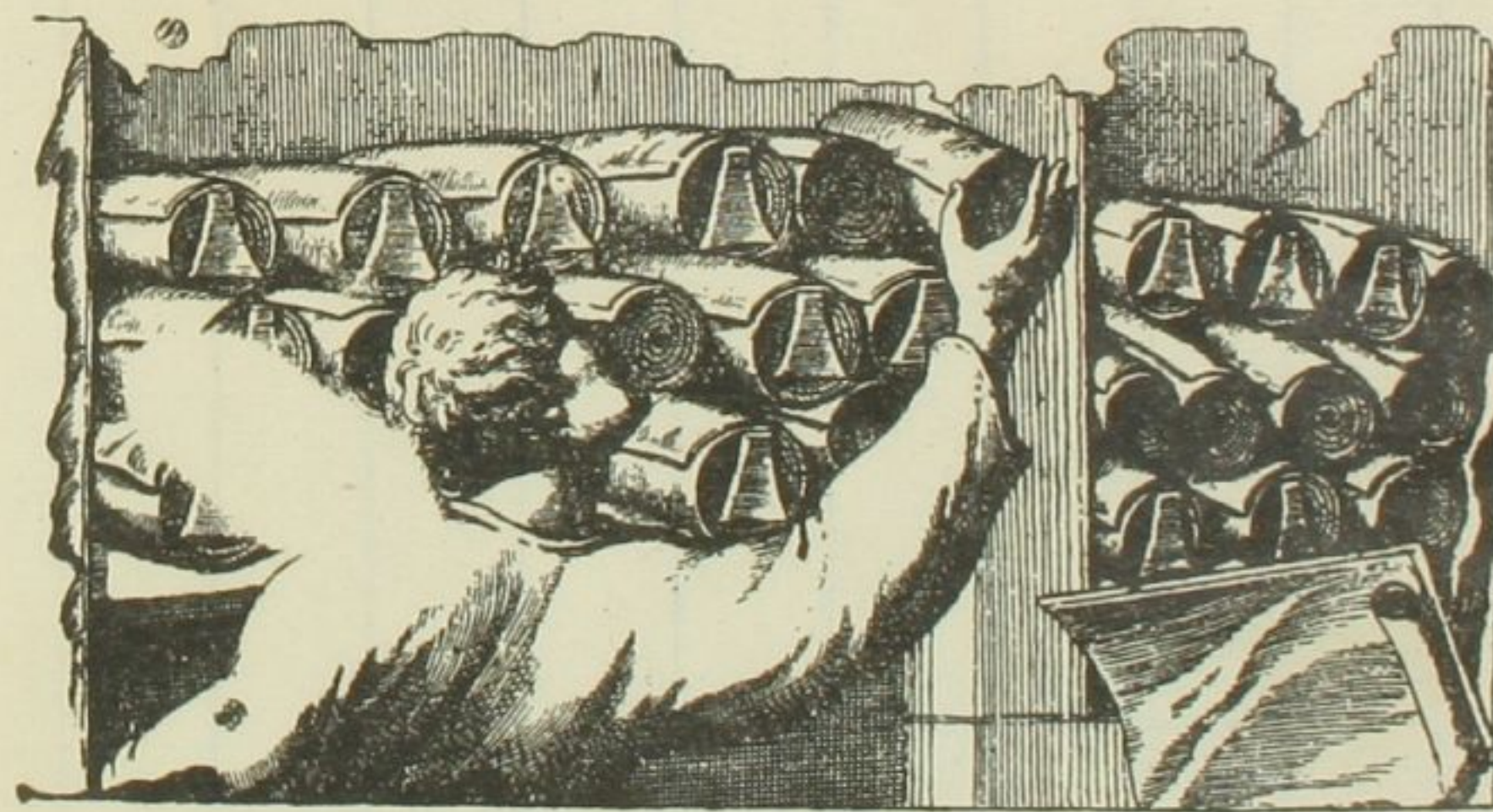


(圖の面側棺石圖五第)

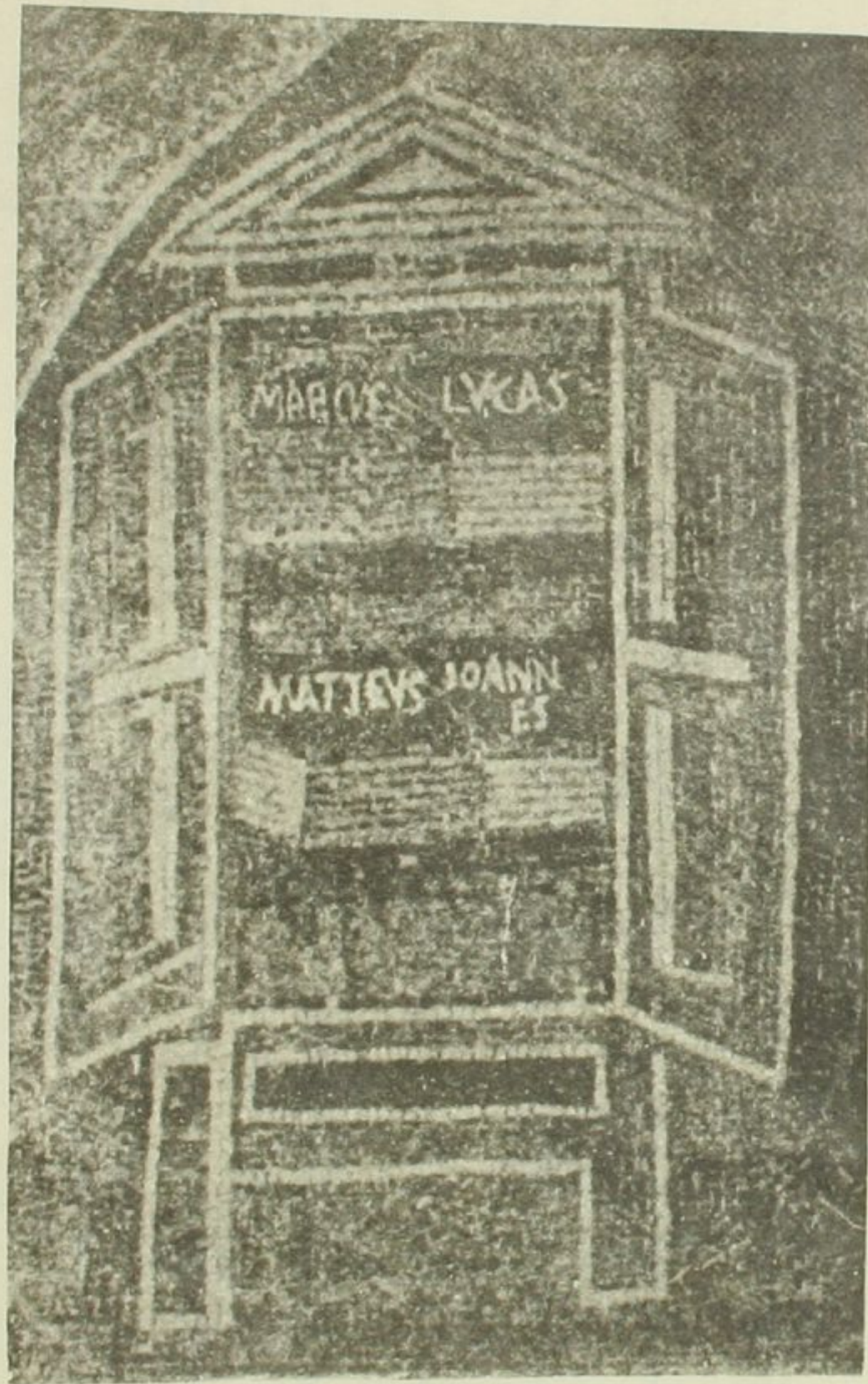
第六圖に示したものは、現在ロトマ市のピラ  
バレストラ公園にある石棺の側面に彫刻され  
た一部で、これが當時の讀書の状況を物語る。  
これは紀元後二〇〇年頃のものとして  
るが、巻物を  
読んでお  
る有様は、  
前に示し  
た第三圖  
とほと同  
様で、た  
とその人  
の前方に細  
長い穴の様なもの  
が刻まれてあるのが  
面白い。  
これは所謂當時の  
本箱で、扉が左右に  
開かれ、  
内に二段の棚がある。  
最上段にあるのは、寫



(スーケノ本子卷圖三第)



(態狀ノ理整物書ルケ於ニマー口代古圖四第)



(圖の箱本代古圖六第)

眞ではよく見えないが、八本の巻物が堅に入れられてあるので、第二段にあるものは、なんだかよくわからないけれども、多分皿のやうなものらしい。第三段には何も無いが、これは將來をほ下部へ棚を増設するためではないかと説明されてある。此本箱の上の方には、裝飾された板に今日の形をした書物が置かれてあるやうに見えるが、こんな形の書物が當時あつたらうか。(見書見棚のやうではあるが、なんだかわからない。左右の柱のやうなものに文字が彫刻されてあるのは、この棺を埋めるについての記事で、讀書には関係がないといふ事である。)

この圖が発見せられたことによつて、古代の讀書とか本箱とかが、大分明瞭になつたが、なほその後第六圖に示したものが出てきた。これは、紀元四四九年に埋められた墓から掘り出された彫刻でこれには下に脚部があり、上に屋根様のものがあつて、大分に進歩した有様を見せられる。書物も形もすでに現今の書冊式である。もう一例は、今フロレンス市のロレンチアン圖書館に所蔵されるコーデキスマミアチヌスの見返し繪である。嚴島にある平家納經の見返しとほゞ同様なもので、この繪は六世紀の半頃に書かれたものであり、それは人の身長よりも大きな本箱の前で、法律家が法律を書いてある繪(第七圖)である。第六圖に示した本箱と同様に屋根風のものがあり棚が五段、書棚が横に置かれて、扉は左右に開かれてある。

ともかく、今日まで得られた古い彫刻繪畫に残された本箱の形式は、紀元二〇〇年から六〇〇年のものが最も古いので、それ以前のものには更に見當らない。この形式は一見頗る進歩しな



(圖七第)

いものゝやうに見えるが、それは文化の程度がそこまで進まなかつたのであつて、われわれはこれらの調査報告を以て、古代のギリシヤ、ローマ人の讀書乃至文庫の状況を充分に窺ふ事が出来る。

製本の事は、前に巻物の裝飾で一寸述べたが、紙の發明後羊皮の應用と共に技術は愈々進んで、今日多數に見得る中世紀の飾り本——多くはバイブル關係のもの——を生ずるに至つた。さきに寺院と書物との事を述べたが、現今ローマのパチカンを訪れる人は、必ずその文庫に驚かされ、又逃がすべからざるものであるのはいふまでもない。このパチカン文庫の抑々の起源はといふと、一五八七年にポーランドのシキスタス五世が始まりで、その時に作られた建築の一部は現存してゐる通り、あんな立派なものである。今のパチカン宮文庫の集書の中で一番誇るべきものは各種——新古各國語——の聖書が、殆ど網羅されてゐるといふ點にあるが、その他にも容易に得られぬ集書が頗る豊富である。世界特に西洋の史實が、このシキスタス五世以來絶えずこの文庫に残されたといふことは、人類にとつてどの位の幸福であつたらう。ギリシヤ以來とかく寺院に關係の深かつた文庫——書物——といふものが、現在のパチカン宮で如實に見られる(第八圖)このほか角に文字を刻んだホーン、ブックス、紙の書物にくさりをつけ持つて行かれない様にした。チェインド、ブックス又はライブラリーなど書くべき事も多いがそれは比較的古い事ではないから、西洋方面はこゝに筆をとめて、さて東洋の方に向はう。



(圖の寫書女經人アデア央中圖九第)

東洋方面に於ける文庫、圖書館の起源及び沿革についてはこれまでの調査研究が頗る進んでをらぬために、甚だ書きにくい。東洋といふ意味もいろ／＼あらうが、先づ手取り早く支那について見るに、西洋方面の文化發生地の如く、即ちアシリヤのやうに遺跡が發掘されて、その原始的狀態が殆どそのまま窺はれるといふ様な事は、全く見當らない。

敦煌あたりから發掘された木簡竹簡の類は報告されてあるが、それが貯藏された状態についてはなにも書いてない。木簡の形に近い今見得る所の印度邊の貝葉風の木片に、封印がされたものは、スタイン氏の報告にも澤山ある。あの形は、チョット綴り本に近いといへやうが、これがどんな箱——即ち書庫——に貯藏されたものかは見當さへつかない。

第九圖に示したものは、やはりスタイン氏が發掘した新疆省の焉耆——Kashgar——附近にあつた壁畫の一部であるが、これは圖に見る如く、當時の僧侶が前記した貝葉風の木片と思はるるものに經文か何かを書寫してある有様である。右手にしてゐるものは筆と見ゆるから、これはすでに筆の發明後のものである事が疑ひない。又左手にしてゐるものは、よくはわからぬがどうも、あの附近から發掘された前述の木片であるやうに考へられる。しかしてそのすでに書かれたものか、またこれから書かんとするものか、いづれとも分らぬ木片が、人物の右側に、今日の洋畫家が郊外寫生に用ゐる椅子のやうなものゝ上に載つてゐる。これが何であるかは、わからぬが、先づ今日のいはゆる机の用をなしたものか或は一步進めれば書物を置くもの——



置き、日時ニ考ふる端、不恰突出し、  
 九草の四五に入、其草の所々、ことごと  
 の、穢の巻根、花をみることも始めて  
 あり得る、流石、前田家の、余近の教書  
 を、漱しきもの、  
 七月十日記

○先頃物成たる大村ちの庄の遺者も、その市  
 場、あつらひ、荒干の、園と見え、中、の、覺  
 阿奈梨の、見、源物、百、の、冊を、見る、法、佛  
 の、造、像を、看、証し、し、る、も、無、項、に、繪、あり、佛  
 像、研究、の、缺、きを、難、き、よ、の、と、考、へ、る、(口上記)

○々々神田教集、中、の、所、の、考、左、の、如、し

異、通、因、費、身、唐、の、二、冊

此、考、蜀、新、都、楊、慎、用、從、南、蕃、と、考、  
 卷、を、二、冊、内、二、冊、神、田、本、利、を、  
 因、を、ね、て、余、考、し、る、に、版、と、考、  
 ぬ、此、支、那、の、道、を、也、似、し、因、を、  
 め、知、此、考、の、を、こ、り、考、し

三、先生、一、夜、の、詠、一、冊

寛、政、九、年、京、都、刊、法、田、君、御、話、  
 川、波、園、北、高、中、士、の、成、章、一、夜、詠、  
 時、の、物、の、集、也、此、冊、上、下、二、冊、也

告尾に申士出たの道のわたり御  
を所勤す北は諸國の舟とて國名の  
八つんもふ葉換色。此の決足を懸  
すもを憂ふ。此の所合に申士出たに  
於て一とと韃名の後より申士出  
る首を為すも後日後日後日後日  
すん各の初を附すとい  
ぬ。申士出た時二つといふ

七月十日記

一 武具の圖

此書嘉永元年美濃の山陽正準の

一冊

十二

序あり大者通つるわ本流飲の是韃  
す所を者も移色をかくる物圖  
二つあり、品名と共に別れり断て、開牌  
とす。海のものも。武家の子弟の如  
しに依つて武具の心を得させんを  
の書也。此種のよき一時の運二無二入  
るも、今もそのりくも、教あり、和菓兵  
器も、いくむかひりある。珠とす  
べし。目に既。丁も、この家の  
存にあらざるを也。

○お早頃こまき舞ひ入に新刊宣傳のわ。新

寛院宮の御日記御傳御消息も刊行するの  
計畫加増し注意を惹いた。都立寛院の宮は和  
宮とゆふある。公武合体といふ政治的犠牲より  
ん此の貴き婦人の真に世法の軌範があつて  
を等平素其の御事蹟の詳かゞ世に自顯ん  
んことを笑ふてあるものである。和宮は孝の天皇  
の皇妹に仁孝天皇の御息女である。母徳仁有  
柄川宮、嫁するべきを、公武合体のシカゴといふ政策  
から身を犠牲しして徳川家茂に降嫁するつれ  
其時御齡僅う二十六才。此時徳川氏の断末は  
つき天下騒然たる時の、降下の時余亦志士の  
横行の危途に其れつれ、嫁するてから多くの軍

月を始ぬゆゑ家茂の御息女に其れを兄君の孝の天  
皇と御傳とさう。維新の革命が起つて其れより  
加増敵とさうつれ。公武の間に或在るん此の  
年長の婦人の御事蹟をいふ。此れは従来往々  
のことが侍つてゐるけれども、此御婦人の御事蹟  
のん此の御事蹟をいふ。言は侍つてゐるのいふ。今  
御日記御消息の御事蹟をいふ。其れは其れ以上  
の御事蹟をいふ。其の御事蹟の御事蹟の御事蹟  
さハこの又想像もしてゐる。裏切りの御事蹟  
心もしてゐる。一身を委ねたといふ丈に犠牲の  
る。あつた。其れは此の不幸な御事蹟を容  
赦する。此れは御事蹟の御事蹟をいふ。其れは



し凡庸の女流たる心。別々困一あるとてさうく時執かの  
変動とゆるゆる見えぬ。あはれあるとて。亦たあつとも人の之れ  
も咎めぬ。あはれあるとて。あはれあるとて。宮の深く帰友  
と守る人、あはれも嫁ついたら以上、徳川の母家、其  
の存亡は我家の存亡と、京都、對し百方徳川の  
の軍衆を謝さん其家の存立を哀訴せえぬ、そのう  
るしい御精神。佛の化身とも仰きせぬ。さき  
とのかある。家茂の御軍が堯云さすと。落飾さんご  
貞節を全ふし、僅うる三十二年を以て。他界  
へうつれ。此宮の一生涯の悲劇の終結。い。僅の  
十六ヶ年の御生涯。注。決。七。徒。五。の。つ。つ。元  
婦人の幼くあるへ(七)とのとちと軌範と始さん

右の御史と云つては、御史に云はれ大御史の字  
に、御史と云ふ。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。  
御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。御史。



の御身を捨て、婚家を救はれたことは實に日本婦人の最高模範として、芳を千載に垂れさせらるゝもので、宮の御日記は當時の實情を語る絶好の史料たる計りでなく、尊き幾多の好教訓を含まれて居るものである。又次に掲ぐる御詠集は同じく御親筆に係る十四冊の御詠草から抜萃したものである。宮は御幼少の頃より夙に諸種の藝道を修められたが、就中書道と歌道とは最も御嗜み深くあらせられた。現存の詠草に書き残された御歌の数は、無慮千七百首に及んで居るが、これは主として明治後閑散の御身となられてからの御詠であるが、其中の一冊には御降嫁道中の御詠なども交つて居る。本書にはこれ等多くの御詠の中から、主として宮の御心事を窺ふことの出来る御述懐と、當時の世相を観るに足る時事の御詠を抜萃し、之に花鳥風月の御歌を加へて三百六十三首を載せることにした。

二十六日 少將への返事午刻過中山を渡す 慶喜より奏聞の書寫予趣意書出す 右趣意書寫

去る三日慶喜上洛之處戰爭に相成候事恐入候 慶喜より承り候趣にては無據次第乍どうか會桑先鋒にて其者共より砲發致し候やにも承り候さ様にては朝敵の名は通難やと存候 右に付追討使向られ候御事承り慶喜故に家名斷絶致候やと實に心配歎居候 慶喜より頼れ候次第も有之私よりも歎願致度存此度藤差登せ候へ共つくつく考候へば慶喜重々不行届の上此度の一件此方より初候事に候はゞ罪逃がたく 朝廷にも罪有物を御咎あらせられず候ては御政道も立せられず候故私などの願は御取上に成不申官軍向れ候はゞ其時に臨み私進退いかゞ致候半後代迄潔名を残し度いろく勘考致候へ共淺知の私決行致し兼個條にて御相談申入候

一官軍向はれ候とも慶喜一身の御征伐にあらせられ候や當家も是限斷絶の思しめしに有らせられ候哉其節私はいかゞ遊ばし戴候やもしく上京の様御沙汰に候共當家一度は斷絶致し候とも私上京の上歎願致し聞召され候御事寄手の將御請合下され候はゞ天璋院初へも其由申聞御沙汰に従上京も致候半再興出來申さぬ事に候はゞ家は亡び親族危窮を見捨存命候て末代までも不義者と申され

御日記 明治元年二月

口 静寛院宮御日記 六冊  
御詠集 十冊

本橋右伯壽家之花箋  
静寛院宮御日記 五冊  
本橋右伯壽家

い花さんてあゝ

○昆田家から贈るに青緑山方の二枚折屏風の  
頼洲「田中頼章」の門下にあつたとおもふ見  
當りつけれど、まゝ何人かあるか、知り得無かつたが  
昆田家から受けは、新豊田の河川氏と云ふこ  
とである、曰々の生荷田のの關係から志願く其  
家へ出入し、目録に昆田の在り度と云ふは、此屏風  
の圖々昆田が病孝とある際出来上つて、其の  
一説をこれと云ふといふ、昆田家ハ片身のつて  
り、心略つれと云ふてお記  
七月十日の記  
○昨日神田の古物に於て左の墨帖を得た

一 上路帖

一冊

卷末、左の後終あり

右近衛隆歩院大相圖其終道心  
十三通換刻以示日好寛政十二年  
五月廿五日平恒入後

隆歩院の墨帖世に刊行されたるものありか  
らう各体皆在り、家花も十種冊あり、あ  
り、隆歩院の近衛家の書を大成し、字  
人を記録する者あり、此の上路帖ハ、三  
藏院、書し肖する不あつて、いくびく軟か  
味のある所異なり、荒き跡もみたり、  
祖傳と書かぬは、今才を獲はるる

とい面目ありて固異なり、此一体もコレシ  
ミンの内訳をかたきを受ふ 七月十日

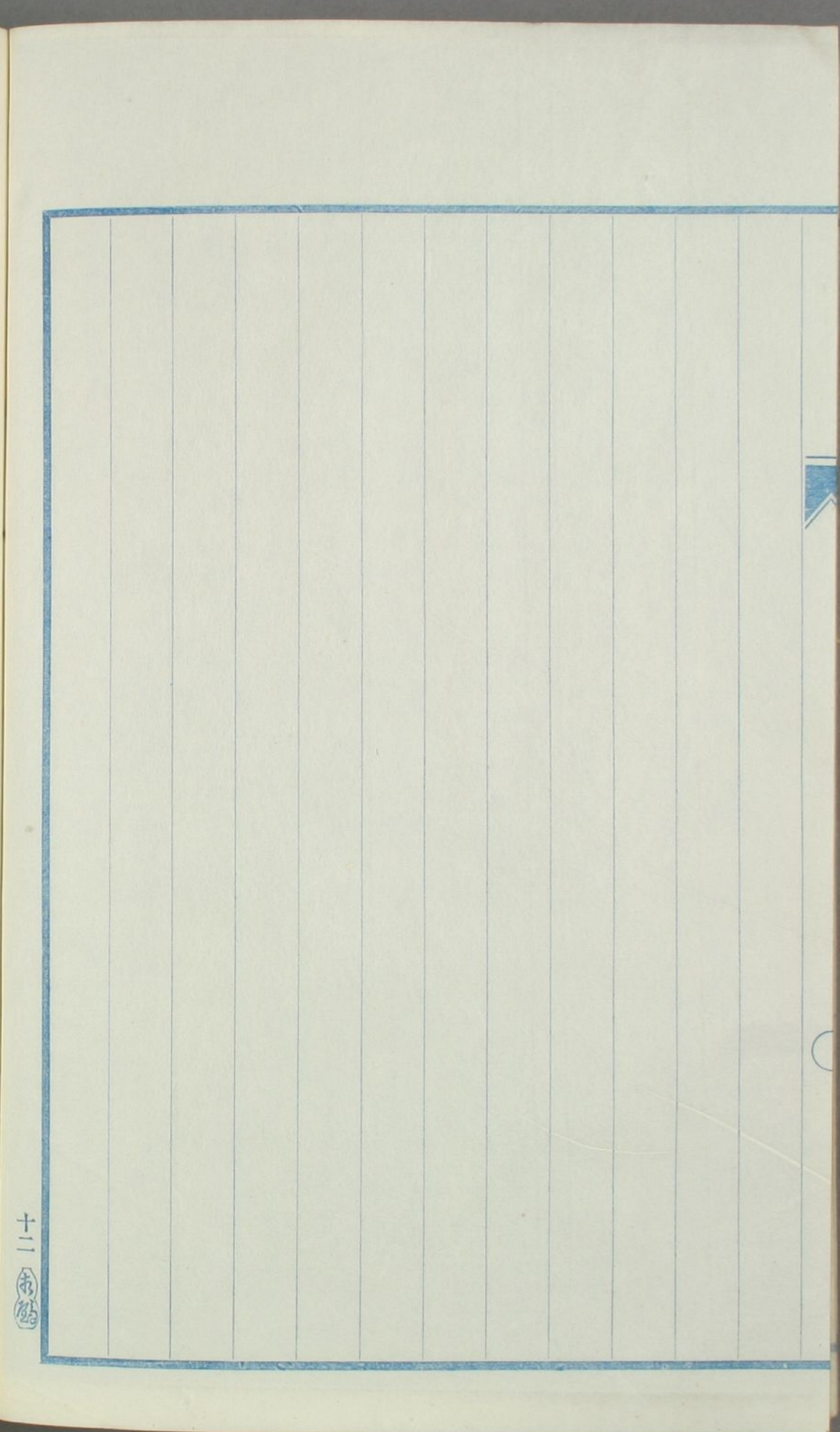
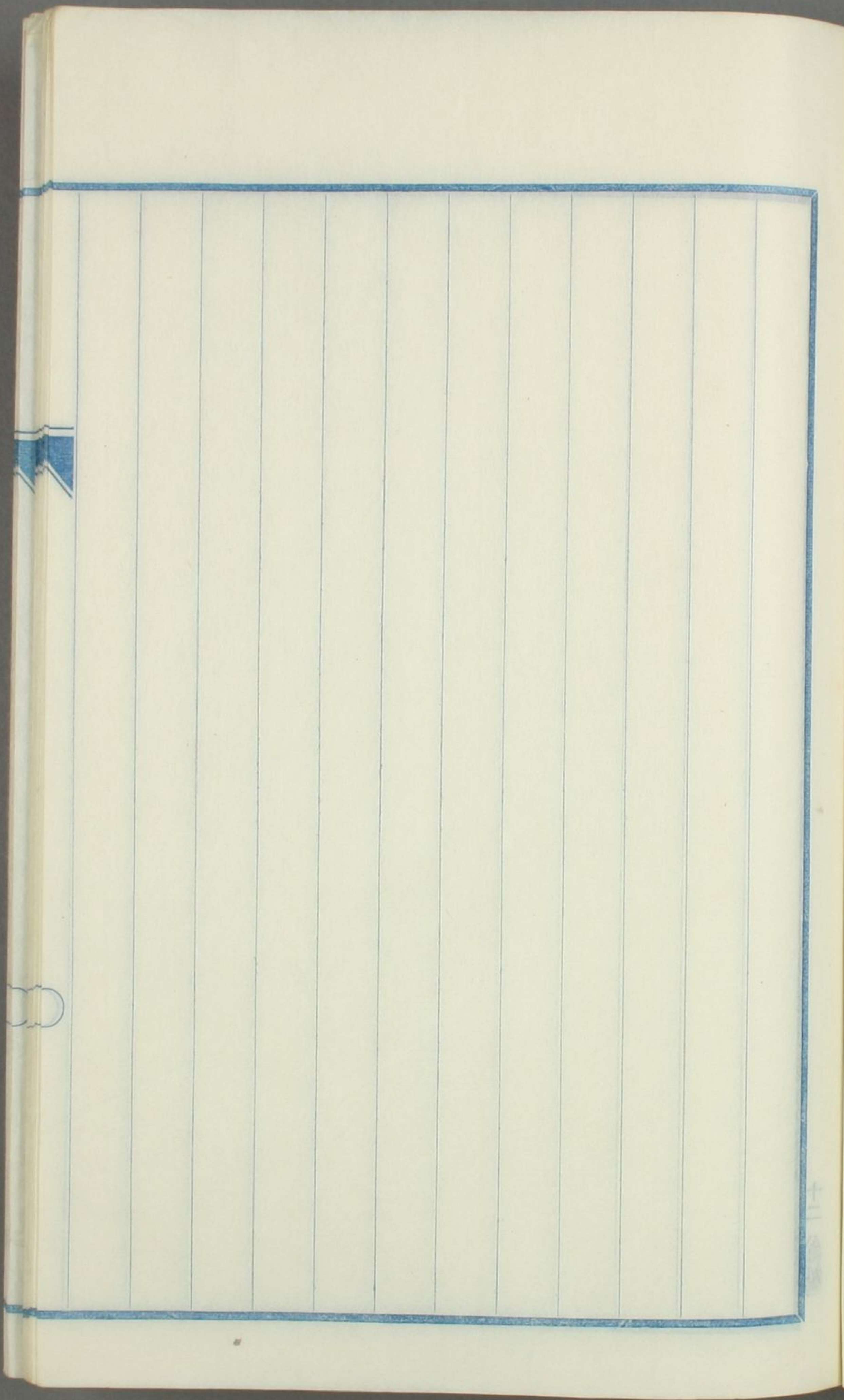
○昨日午後大隈令後、城内記念堂事業の委員会を以  
て此より業用始の社債の報告をなす、募  
集成績は城内の募集印税二萬を併せ、既に  
七萬圓以上を達す、第一回申込額二萬圓内  
の印刷に附し、今後交付する金二萬七千九  
百餘圓、頗る収況といふ可なり。

既に此書事業も準備委員の性質もこの要むと  
なり、随つて準備委員の性質もこの要むと  
なり、得ず、仍て在備委員なりし面をも加へ

更に委員の委員二十數名を奉行内三名を  
任委員とする、余は準備委員とす、か亦推  
せんて委員の委員会とする。

来月の暑中、自來募集休止とするべく、つき  
月中、努力し、少くも一萬圓募集するの要  
あり、大改言面も月内着手を要し、月末余出  
張のうらと決す。

此日又剝剝界方面の募集集につき、内城せんぬめ  
歌よ、飯座の大谷林治、帝劇の山本久三、中  
と申へ移居、杉本伊原、その他早稲田出身  
演劇に關係ある四五の役友、七卷加し、種々協  
議する、未だ、此際をせり、て散す(七月十日)



十二  
金

以下  
9 丁  
白紙

坪内博士  
記念  
演劇博物館設立發企人

代表 子爵 澁澤 榮一

市島 謙吉 五十嵐 力

池内 信嘉 石渡 敏一

侯爵 大隈 信常 大谷 竹次郎

川村 德太郎 金子 馬治

幸田 成行 上遠野 富之助

高田 早苗 田中 穂積

中村 歌右衛門 中村 雁次郎

永富 雄吉 上田 萬年

山崎 覺次郎 山本 久三郎

小林 一三 安田 善次郎

增田 義一 福澤 桃介

侯爵 小村 欣一 三上 參次

白井 松次郎 平田 讓衛

砂川 雄峻

(いろは順)



拜啓 既に新聞紙上で御承知かとは存じますが、別紙の如き趣意のもとに坪内博士記念の演劇博物館が我が早稻田學園内に設立せられることになりました。就いて、説明書の中にもある通り坪内先生からも多大の寄與を約されてをりますが、之が完成には尙ほ多額の資金を必要と致します。

改めて申すまでもありませんが、先生が恩師として個人的に或は社會的に、陰に陽に與へられたる恩惠は實に筆舌に盡し難いと存じます。けれども、從來報恩の舉を企てるの内議があつても、先生は固辭して受けられませんでした。然るに今回の舉は、其の實現が先生多年の宿志でもあり、之を諒とされました以上、吾等に於ては一日も早く其の達成を期して止みません。それに、事業本來の性質から見ても、亦謝恩の誠を致す絶好無二の機會である上から見ても、必要と信じましたので、過般文科校友有志會を開き、今回の計畫に對しては特に期成會を組織して最善の努力をなす、與ふ限りの寄附により之が完成に一致協力することに決しました。何卒右の事情十分御諒察下され、深厚なる御贊助御後援を賜はるやう熱望致します。

追て不取敢各年度に設けた委員の方からも別に御依頼狀を差出す筈であります。くれぐれもよろしく御配慮下さるやう願ひ上げます。

演劇博物館早大文科友期成會發企人

- |         |         |          |          |
|---------|---------|----------|----------|
| ○金子 馬治  | 種村 宗八   | 中桐 確太郎   | 永井 一孝    |
| 紀 淑雄    | 村山 駒之助  | 水谷 弓彦    | ○大久保 常正  |
| 小 木 植   | 竹内 松治   | 福味 文卿    | 後藤 寅之助   |
| 宇津木 驪太郎 | 原 富藏    | ○五十嵐 力   | 德 廣 萬    |
| 服 部 操   | ○土屋 詮教  | 山 田 清作   | 丹 生 實榮   |
| 山 岸 宗   | 小 林 鐘吉  | 本 多 文雄   | 嘉納 虎太郎   |
| 喜安 進太郎  | 梅澤 精一   | 平野 履道    | ○長谷川 誠也  |
| 清瀧 知龍   | 繁野 政瑠   | 谷 紀三郎    | ○宮 田 修   |
| 永持 徳一   | ○大宮 英之助 | 内 山 正居   | 草 村 松雄   |
| 川瀬 義雄   | 徳田 浩司   | 正 宗 忠夫   | ○辻 同次郎   |
| 市野 彌三郎  | 岡野 養之助  | 中 村 吉藏   | ○島 田 賢平  |
| 鈴木 浩之   | 塚越 丘二郎  | 森 田 勝平   | 蒲 生 治郷   |
| ○前 田 晁  | 岩本 堅一   | 窪 田 通治   | 足 立 恭三   |
| 坂口 二郎   | 中 川 重政  | 藤 本 慶祐   | 蘆 田 伊人   |
| ○西村 眞次  | 村上 武三郎  | 木 原 順一   | 中 村 仲    |
| 武田 豊四郎  | 石野 元藏   | ○高須 芳次郎  | 横 山 有策   |
| 吉江 喬松   | 日 高 只一  | 森 岡 格雄   | ○岡 村 千曳  |
| 片 上 伸   | 伊 達 俊光  | 相 馬 昌治   | ○楠 山 正雄  |
| 生 方 敏郎  | 會 津 八一  | 水 谷 武    | 島 崎 新太郎  |
| 關 與三郎   | 杉 森 孝次郎 | 川 上 惣右衛門 | ○八 木 淳一郎 |
| 橋 高 廣   | ○中 村 將爲 | 針 重 敬喜   | 秋 田 徳三   |

池田大伍 内山舜 石川六郎 岡田復三郎  
 關部信次 伊藤輔利 黒木勘藏 土岐善麿  
 服部嘉香 美土路昌一 名倉聞一 仲田勝之助  
 市川又彦 本間久雄 坪内士行 仲木貞一  
 加藤信正 島村民藏 河面仙四郎 坂崎坦  
 須藤鐘一 森脇毅 木山十彰 吉田源次郎  
 加能作次郎 日高清一 森下岩太郎 河竹繁俊  
 清水泰次 長田幹彦 稻毛金七 島中雄作  
 伊藤康安 定金右源二 矢口達 原田實  
 谷崎精二 廣津和郎 増田綱 横井春野  
 金光國開 西宮藤朝 澤田正二郎 樋口國登  
 伊達保美 宮島新三郎 松原至大 細田源吉  
 西條八十 中島德行 石井眞峰 塚越菊治  
 神絢一 赤松保羅 木村毅 高田保  
 平林初之輔 永田衡吉 香原一勢 長谷川浩三  
 小寺融吉 戸川眞雄 岡田三郎 豊岡佐一郎  
 濱田廣介 水谷勝 柳田泉 長谷部孝  
 小島幸治 淺原六朗 牧野信一 武藤直治  
 額田六福 田島淳 江間道助 幡谷正雄  
 大村弘毅 伊達豊 小林龍雄 浦上五三郎  
 帆足圖南次 中山議秀 小田切照 高丘和季  
 鷹野新一 工藤好美 堀正福 白石靖  
 高橋良雄 林健次郎 吉澤繁市 百瀬一  
 古川義治 中西忠三郎 内ヶ崎浩一郎 長沼富水雄

山口剛 石丸悟平 上井磯吉 渡邊新三郎  
 濱村米藏 水口鹿太郎 吉岡信敬 矢田義勝  
 三上於菟吉 吉田幸三郎 牧田清之助 白石實三  
 細田民樹 木村毅 薄田貞敬 中島茂一

(右は大凡年度順ではあります。次第は全く不同です。  
 ○印を附したのは不取敢定めました委員の方です。)

文科校友各位

坪内博士 演劇博物館設立寄附芳名 (申込順) (第一回)

早稲田大學出版部	五、〇〇〇	村岡久萬男氏	三〇	宮島新三郎氏	五〇
高田 早苗氏	一、〇〇〇	塚越 菊治氏	三〇	平林初之輔氏	五〇
市島 謙吉氏	五〇〇	山本利喜雄氏	三〇	前田 晁氏	一〇〇
田中 穂積氏	五〇〇	山田太一郎氏	三〇	永田 衡吉氏	五〇
金子 馬治氏	五〇〇	星野憲太郎氏	一五	山田 清作氏	六〇
五十嵐 力氏	五〇〇	廣田喜三郎氏	一五	加藤 信正氏	五〇
長谷川誠也氏	五〇〇	山口 毅氏	一〇	中村 吉藏氏	五〇
種村 宗八氏	三〇〇	東 四郎氏	二〇	楠山 正雄氏	一〇〇
西村 眞次氏	五〇〇	大石善次郎氏	二〇	河竹 繁俊氏	一〇〇
吉江 喬松氏	二五〇	石田 良吉氏	一五	服部 嘉香氏	一五〇
横山 有策氏	二五〇	難波理一郎氏	六〇	辻 同次郎氏	三〇〇
本間 久雄氏	二〇〇	片山 利久氏	二〇	西宮 藤朝氏	五〇
井浦銀三郎氏	二〇〇	上村 鐵雄氏	一五	人見 圓吉氏	五〇
田村知三郎氏	三〇〇	河内 信久氏	五	中村 將爲氏	一〇〇

大坪 信氏	三〇	市川 萬助氏	五	小寺 融吉氏	三〇
橋本 榮司氏	一五	猪狩 政夫氏	五	關 與三郎氏	五〇
丸山 岩吉氏	一〇	大塚 義次氏	三	杉森孝次郎氏	五〇
岡本 季三氏	一〇	坂田 善一氏	三	繁野 政瑠氏	五〇
伊藤 輔利氏	一〇	清水源泉堂氏	一〇	名倉 開一氏	三〇
青山 幸吉氏	五〇	本間十三郎氏	二〇	會津 八一氏	二五〇
高島小三郎氏	三〇	牧田清之助氏	一〇	片上 伸氏	五〇
小柳善四郎氏	二〇	森岡 格雄氏	一〇	池田 龍一氏	五〇
福島幸太郎氏	一五	池田 大伍氏	一〇	小久江成一氏	二〇〇
石野 元藏氏	一五〇	高田 保氏	五〇	吉田 秀人氏	一〇〇
青柳 篤恒氏	一〇〇	細田 源吉氏	五〇	齋藤和太郎氏	五〇
山田 賢治氏	六〇	細田 民樹氏	五〇	柴 孝平氏	二〇
岸 至氏	五〇	水谷 弓彦氏	六〇	大村 弘毅氏	一〇〇
青柳 順一氏	三〇	長谷川浩三氏	五〇	伊達 豐氏	一〇〇
鹽澤 昌貞氏	三〇	松原 至大氏	五〇	中島 德行氏	三〇
男爵前島 彌氏	五〇	山内不二雄氏	五〇	香原 一勢氏	二〇
村山駒之助氏	一〇〇	伊地知純正氏	五〇	錦織 春雄氏	五

評内博士演劇博物館設立寄附芳名(申込順)第二回

村井五郎氏	三〇〇	小沢恒一氏	三〇	梅野満雄氏	一〇
西條八十氏	五〇	江間道助氏	三〇	大腸鉄三郎氏	一〇
伊達保美氏	五〇	渡利弥生氏	二五	木村瑜一郎氏	五
本多浅次郎氏	一五	舟木重信氏	五〇	後藤寅之助氏	三〇
平沼淑郎氏	三〇	熊崎武良温氏	二〇	佐々木積氏	五〇
坪谷善四郎氏	一五〇	煙山專太郎氏	五〇	河野文兼氏	五
樋口國登氏	一〇〇	清水泰次氏	五〇	川村静氏	五
平渡庄兵衛氏	五〇	河面仙四郎氏	五〇	上野吾永次氏	三
原忠篤氏	二五	窪田通治氏	五〇	大江清一氏	三〇
日高猪兵衛氏	一〇	山口剛氏	五〇	辻岡栄三氏	二
黒木勘藏氏	一〇〇	宮田修氏	三〇	竹下明治郎氏	一〇
三枝守富氏	五〇	山路不願三氏	二〇	福村亀雄氏	三〇
池田龍一氏	五〇	服部たの氏	一〇	菅井禎一氏	五
馬田行啓氏	五	服部修氏	五	小川健作氏	五〇
中村萬吉氏	三〇	栗原敏子氏	五	杉木喬氏	三
松山二郎氏	三〇	大塚祐次氏	一〇	名取克氏	一〇
土橋仁之進氏	一五	宮崎寛三郎氏	一〇	江副黄之氏	五〇
山岸光宣氏	五〇	若見信雄氏	一五	鳥居清忠氏	一〇
伊佐 襄氏	一〇	佐藤 進氏	一〇	高下才介氏	三
免取慶郎氏	一五	塚越兵郎氏	一五〇	額田六福氏	一〇
赤松保羅氏	二〇	巖谷冬生氏	一〇	玉村源吉氏	三〇
名取夏司氏	一五〇	蒲生治卿氏	五〇	長沢才助氏	三
林 笑未夫氏	一〇〇	丹尾礒之助氏	一五	小林堅三氏	二〇
柴崎市郎氏	三〇	野尻正英氏	五〇	帆足理一郎氏	五〇
稻毛金七氏	三〇	矢口長右衛門氏	二〇	伊藤康安氏	五〇
谷崎精二氏	五〇	浮田和民氏	二五	今関良雄氏	一五

河野義博氏	二〇	塚本賢曉氏	一〇	三田村玄龍氏	一〇〇
帝劇第七期女優	一五〇	中桐雄太郎氏	三〇〇		
片山義行氏	五〇	福沢桃介氏	三〇〇〇	川瀬義雄氏	
谷口政秀氏	一〇	日清印刷会社殿	一〇〇〇	振替口座一〇	
奥本義實氏	一〇	丸善社長崎信興氏	五〇〇	吉岡文次郎氏	
芳野百次郎氏	三	小林又七氏	二〇〇	錦繪六一枚	
紀淑雄氏	二〇〇	坂本三郎氏	三〇〇	倉富了矣氏	
岡本光玉氏	三〇	玉島實雅氏	三〇	今昔操集代記二冊	
水谷勝氏	三〇	佐藤勝太郎氏	五	竹豊故事冊	
岡沢秀虎氏	五	矢代代次氏	一〇		
藤沢利喜郎氏	五	和田子規子氏	一〇〇		
原嘉道氏	一〇〇	齋藤潔氏	二	柴田正氏	二〇
米沢元健氏	五	岸田永英氏	三	菅原英次郎氏	五〇
鹿島増藏氏	五	早稲田大學殿	一〇〇〇	丸川順助氏	一〇
古田傳三郎氏	三	秋野光廣氏	五	倉富了矣氏	五
井上實夫氏	一〇	秋田成光氏	二〇	宇津木騷太郎氏	三〇
末沢潤吾氏	五	田中傳太氏	一〇〇	小泉一雄氏	五〇
吉江汪氏	一〇	水上鐵治郎氏	五	大隈信常氏	一〇〇〇
金山音治氏	五	間民夫氏	五〇	増田義一氏	一〇〇〇
大森慶治郎氏	二〇〇	和田利彦氏 <small>春陽</small>	二〇〇〇		
市村英輔氏	五〇	本山大阪會社社長殿	五〇〇		
大森 丙氏	五	本山彦一氏	二〇		
三浦繁雄氏	三	中田一良氏	五		
大瀬甚太郎氏	一〇	土屋詮教氏	一〇〇		
岡本直次郎氏	三	角田柳作氏	一〇〇		
窪田茂喜氏	三	本多文雄氏	一〇〇		
大隈熊子氏	五〇〇	川瀬義雄氏	一五〇〇		

合計 七十九万七千九百一十四

二十七年七月十二日 又

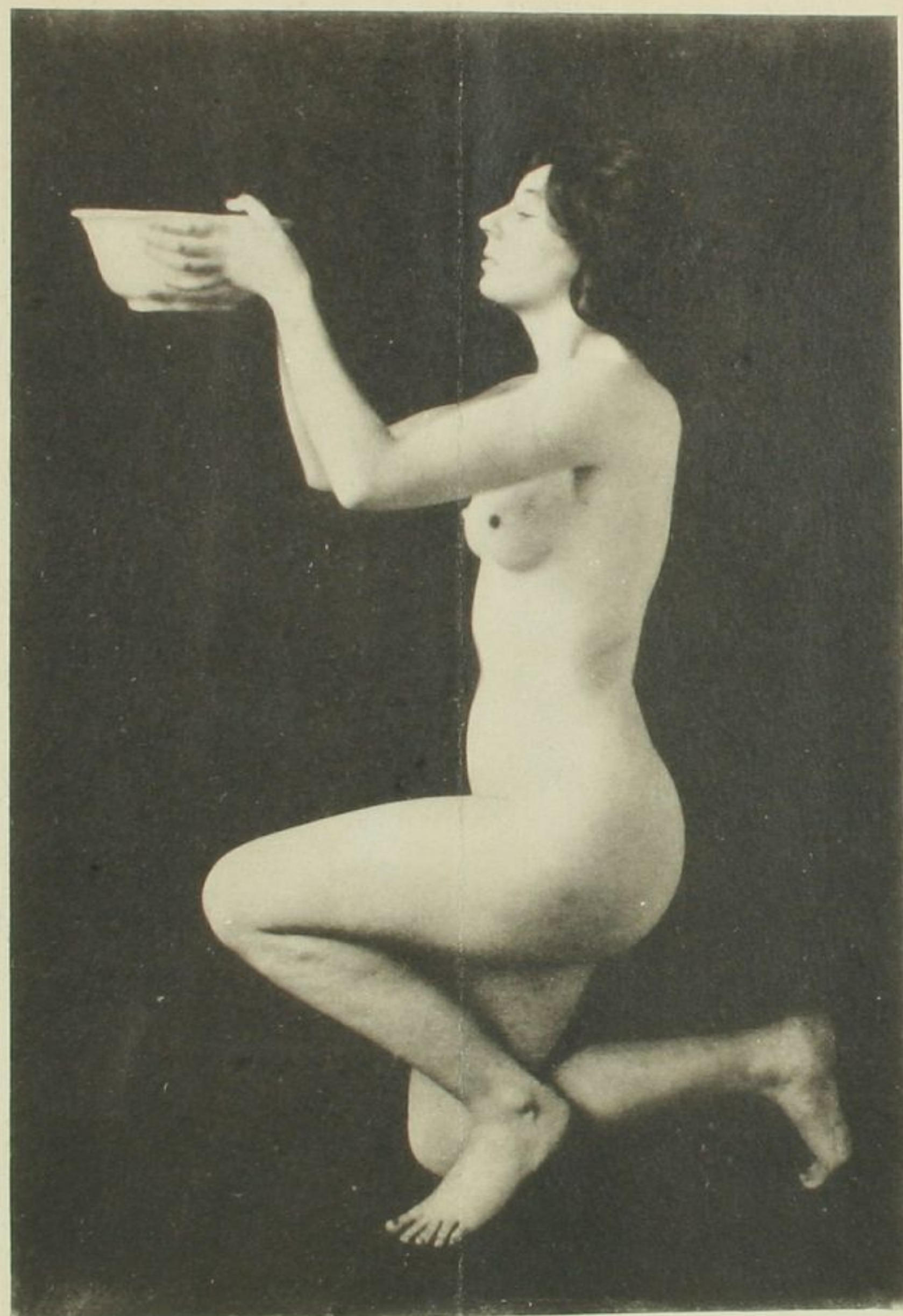
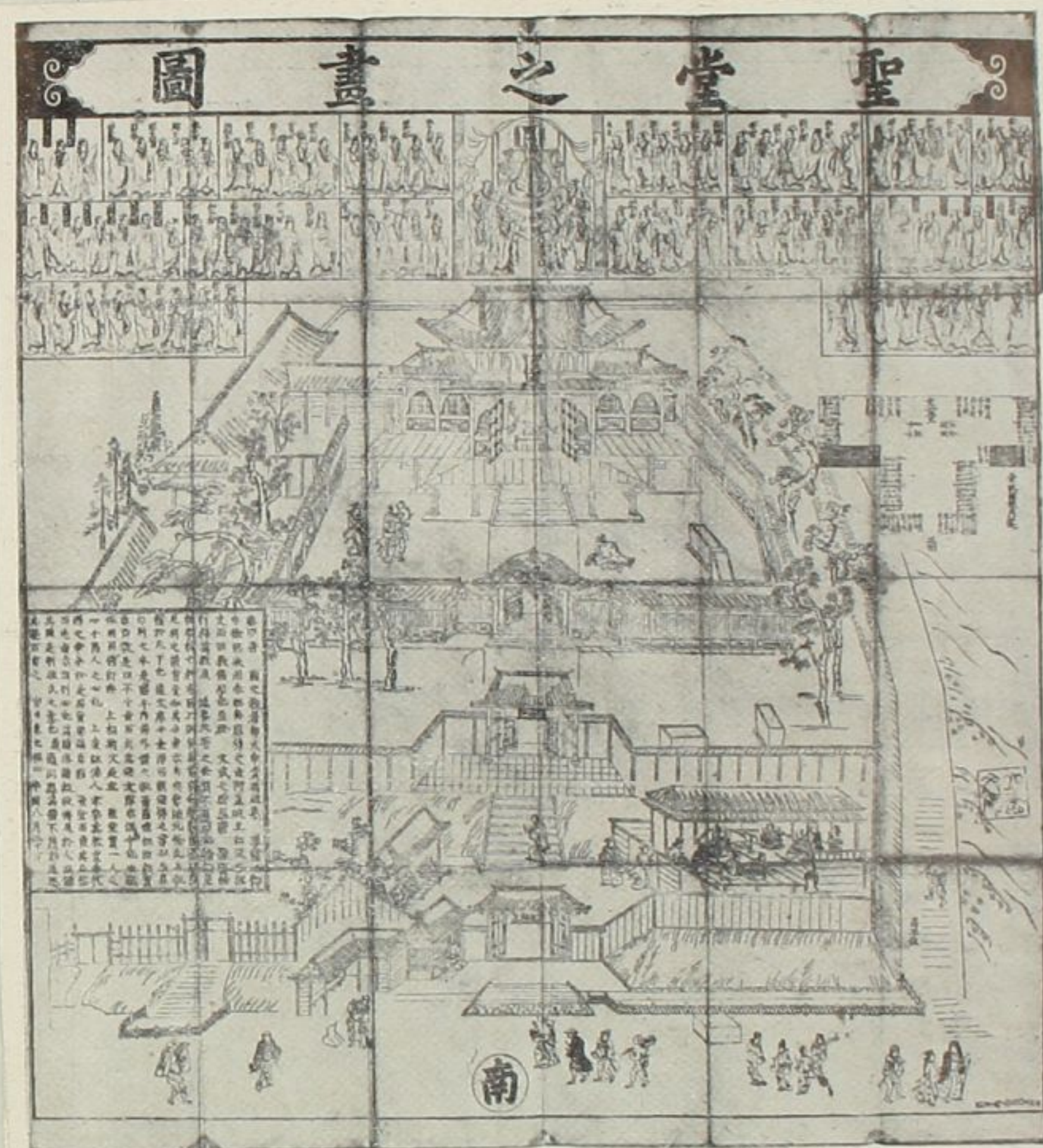


PLATE 14

モデル No. 1



(畫宣師) 圖畫之堂聖阪平昌戶江

